

# 長野県西部地震 活動体験記



王滝村消防団











# 長野県西部地震 活動体験記

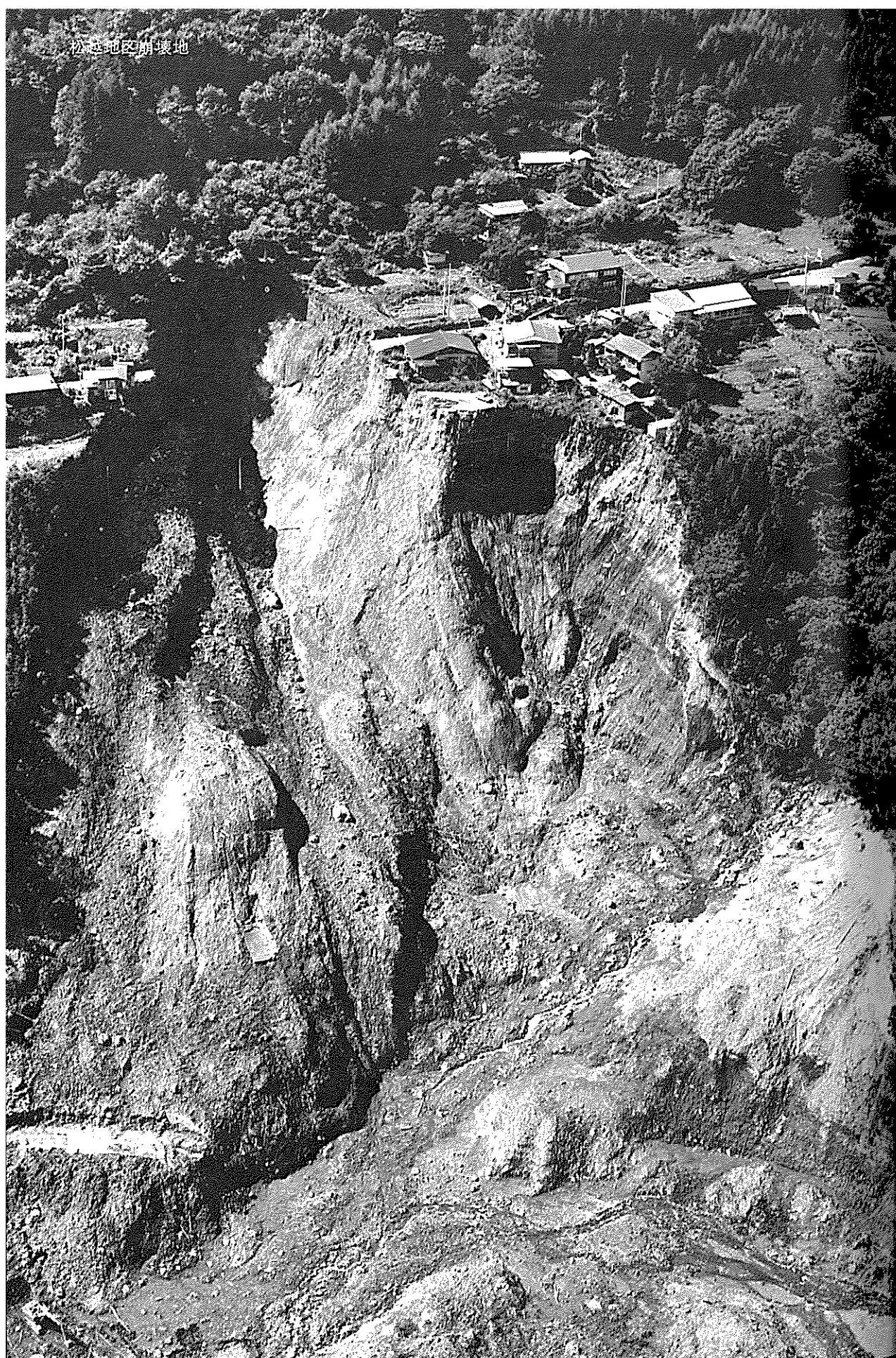


王滝村消防団





松越地区崩壊地







御嶽山と伝上川、濁川の災害前

御嶽山と伝上川、濁川の大崩落のあと



## 発刊によせて

村長 家高 卓郎

消防団諸君は一昨年の大震災の際は行方不明者の捜索を始め、病人老人の避難誘導、危険箇所の警戒その他物資の配分作業、炊き出しの応援等々献身的な努力をされました。

全村壊滅かとも思われたあの惨状の中で、自己を顧みず三十有余日にわたり犠牲的奉仕で、団長を中心に日夜活躍されましたことに対し、心から敬意と感謝を申し上げる次第です。不幸にして三名の団員が災害の犠牲となりましたことは、痛恨の極みこの上もなく誠に残念でなりません。改めて心からお悼み申し上げ、御冥福をお祈りいたします。

爾来それぞれの災害復旧も順調に進み、元の姿を取り戻すのもあと一息というところまでできましたので、皆さんの一層のお力添えをお願いいたします。

災害時に於ける王滝村消防団の活動が認められ、県消防協会会長賞を始め、知事賞、建設大臣賞、消防庁長官賞、そして今回の総理大臣賞と数々の榮譽ある受賞をされましたことを、心からお慶び申し上げるものです。

この度の発刊にあたり、一言申し上げてごあいさつとします。



## 発刊にあたって

王滝村消防団長 村 木 與 助

昭和五十九年九月十四日午前八時四十八分、突如として王滝の地を揺るがし、一瞬にして二十九名の尊い生命を奪ってしまった長野県西部地震。のどかな山村は、地震により、村内四か所で発生した大規模な土砂崩落により、周りの様相が一変してしまいました。この未曾有の大災害により道路の決壊、家屋の流出、倒壊等、総額四百億円余の大被害を受けました。

連続して襲ってくる余震、当時、村人は「これから村はどうなるだろうか、生活はできるだろうか」と恐怖と不安のどん底に突き落とされましたが、国、県関係機関挙げての素早い対応により、早急に生活基盤の復旧がなされ、日ごとに村民も落ち着きを取り戻してまいりました。震災後、二年余を経過した現在、治山、砂防、道路等の復旧工事も急ピッチで、順調に進められ、八〇％近くが完成し、地震災害の爪跡も薄らぎ、御嶽山を中心とした観光主体の村は、客の入り込みにより活気も出、村民の生活にも、明るさが蘇っております。震災の傷手から立ち直ることができましたのも、国、県をはじめ、全国の皆様方から御援助、激励をいただいた賜であり、厚くお礼申し上げます。

我々消防団も、総団員百二十名と少数ではありますが、発災時より約一か月間と長期に亘り、団長(当時滝正昭氏)を中心に団員が一致団結し、住民の避難広報、誘導、出火防止広報、夜間警戒、危険地域の警戒、交通

整理、救援物資の搬入・搬出、行方不明者の搜索と、住民の先頭になり種々の活動に精一杯頑張りました。この間、国、県機関、消防庁、日本消防協会、県消防協会をはじめ、県、郡内外の消防団、関係の方々の暖かいご支援、ご協力を賜わり、団員の活動の励みになりましたこと、衷心より深く感謝申し上げます。

また今回の災害活動が認められ、総理大臣表彰をはじめ数々の榮譽ある賞を受賞しました。誠に光栄であり、今後の消防活動の励みとして参りたいと存じます。

私達消防団は、難行した搜索活動をはじめ幾多の活動により学び得た体験を、小冊子にまとめ、大変遅れましたが今回発刊することになりました。この冊子が、消防関係者、また多くの方々に幾分なりともお役に立てば幸いに存じます。

二十九名の御霊のご冥福をお祈りし、二度と大地震、大災害が起こらないことを念じ、発刊の言葉といたします。

長野県西部地震活動体験記 ● 目 次

発刊によせて……………1

発刊にあたって……………2

村の概要……………6

消防団の沿革……………7

地震の概要……………8

投稿文……………23



|     |    |
|-----|----|
| 座談会 | 79 |
|-----|----|

発生直後に何をしたか

避難体制と情報伝達

長期にわたった捜索活動

|        |    |
|--------|----|
| 追悼のことば | 92 |
|--------|----|

|        |    |
|--------|----|
| 震災活動日誌 | 94 |
|--------|----|

|    |     |
|----|-----|
| 御礼 | 101 |
|----|-----|

|      |     |
|------|-----|
| 編集後記 | 103 |
|------|-----|

|    |         |    |
|----|---------|----|
| 写真 | 11／表彰関係 | 97 |
|----|---------|----|

## 村の概要

王滝村は長野県下最西端に位置し、木曽御嶽山（3,063m）を最高に最低790 m の海拔高にある村です。鎌倉時代後期に三浦氏一党が飛驒から三浦平（現三浦ダム、昭和12年建設湖底）に入り定住したのが村の始まりといわれています。

村の面積は312.71 km<sup>2</sup>と県下 3 番目の広さで、その92%が山林であり、またその83%が日本三大美林の一つである木曽ひのきを有する国有林です。王滝村は観光立村を村政の柱にかかげ、小規模な農業、林業を兼業する中で全国的な御嶽信仰の信徒200万人を中心とした御嶽登山客と御岳スキー場（リフト14基を擁する）による観光産業をその基盤としています。

昭和60年度より国の新エネルギー総合開発機構が地熱開発促進調査地として、3年間にわたり14億円の予算で調査が行われ、将来地熱発電所の建設が予定されています。村もこの計画が実現されれば地熱発電の余熱を利用した施設園芸、観光にもメリットがあるものと期待しています。

人口は昭和36年に牧尾ダムが建設されたことにより減少、昭和59年9月14日現在1,333人、429世帯と過疎村になっています。

昭和51年から群発地震の発生、昭和54年10月28日御嶽山の有史以来の噴火が起きましたが噴火は鎮静化し、昭和56年7月1日から噴火口を除き登山禁止規制が解除となりました。

そして昭和59年9月14日、王滝村を震源地とする長野県西部地震が発生、現在その復旧につとめています。

## 王滝村消防団沿革

- 天明5年巳11月 火之用心心被仰附付 村方より総連判じ請書を出す
- 大正11年4月7日 王滝村消防組発足 定員122名  
 第1部 野口 上条 下条 三沢 計72名  
 第2部 崩越 淀地 二子持 計50名  
 初代組頭に松原彦右エ門  
 腕用ポンプ2台
- 大正12年6月30日 定員153名(部長定員外)  
 第1部 103名/第2部 50名  
 王滝村防護団一防空演習実施のため編成
- 昭和7年8月1日 ガソリンポンプ購入
- 昭和14年4月1日 消防組と防護団を統合して警防団に改組 定員121名  
 第1分団 4消防班と警防班  
 第2分団 2消防班と警防班
- 昭和19年4月1日 サイレン購入
- 昭和21年12月31日 王滝村消防団発足 定員210名  
 第1分団 東 下条 上条  
 第2分団 田島 三沢 野口 中越  
 第3分団 淀地 崩越 二子持  
 第4分団 滝越  
 自動車分団
- 昭和26年5月3日 自動車ポンプ購入
- 昭和33年4月1日 牧尾ダム水没により1分団減
- 昭和46年7月14日 小型動力ポンプ付積載車第2分団配置
- 昭和47年4月1日 第3分団が第2分団と合併し1団減  
 5月24日 団旗購入  
 10月17日 自動車ポンプ車自動車分団配置
- 昭和50年8月1日 滝越自衛消防団発足
- 昭和54年10月28日 御岳山噴火で警戒体制とる
- 昭和55年4月1日 自動車分団を第3分団とする  
 10月12日 木曽郡ラッパ吹奏大会優勝
- 昭和57年3月12日 退職金を勤続18年以上に改正  
 3月25日 消防定員130名となる  
 8月8日 郡ポンプ操法大会第2部で優勝
- 昭和58年8月23日 自治体消防発足35周年大会

# 長野県西部地震の概要

## 地震の概要

発生日時

昭和五十九年九月十四日（金）午前八時四十八分

震源地

長野県木曽郡御嶽山付近  
（東経一三七度三三・六分）  
（北緯三五度四九・三分）

震源

深さ二キロメートル（推定）

規模

マグニチュード六・八

震度

六（王滝村推定）

余震

二、九八五回

## 被害の概要

（昭和六十年十月十三日現在、王滝村関係分のみ）

人的被害

死者 一四名（遺体確認）  
行方不明者 一五名  
重軽傷者 五名

家屋の被害

全壊 一四棟  
半壊 七三棟  
一部破損 三四〇棟

被害総額

農業関係 四一七億五、四〇〇万円  
林業関係 二億八、七〇〇万円  
公共土木施設 九三億九、〇〇〇万円  
水道施設 一一三億二、五〇〇万円  
商工関係 二億円  
教育関係 七億四、七〇〇万円  
その他 一億二、四〇〇万円  
国有林野関係 七億 七〇〇万円  
一八九億七、四〇〇万円



# 主な対応

## 対策本部

木曽地震県災害対策本部（県）

県庁

九月十四日 十二時三十分設置

木曽地方事務所

九月十四日 十時三十分設置

現地対策本部

九月十六日 十九時設置

王滝村地震対策本部（村）

役場

九月十四日 九時設置

## 災害救助法適用

王滝村

九月十四日 十五時三十分

## 住民の避難先

王滝小学校／王滝村保育所／国民宿舎／高齢者コミュニティ他

## 電気

三五〇戸停電（九月十四日十六時三十分現在）

## 通信

九月十四日 十六時三十分 市外回線一部不通

九月十六日 全面復旧及び臨時回線、非常災害用公衆電話増設

## 自衛隊

九月十四日 十時二十二分 村長から県知事に自衛隊派遣要請

十二時三分 自衛隊第十三普通科連隊出動

## 搜索活動等

（五十九年九月十四日～十一月二日）

自衛隊

延 六、五〇〇人

県警

延 四、五一八人

消防団

延 四、〇五八人

地元

延 一、二五一一人

応援

延 三、一二八人

民間

延 五六二人

計 二〇、〇一七人

延 八〇九台

重機稼動状況

## 災害救助法

（県関係）

被服・寝具の給与

九月十四日～十月三日

応急仮設住宅の設置（七戸）

九月十四日～十月三日

住宅の応急修理（十八戸）

九月十四日～十月一三日

（村関係）

避難所の設置（十九所）

九月十四日～十月二十五日

炊き出し等の食品の給与

九月十四日～十月二十五日

飲料水の供給

九月十四日～十一月二日

行方不明者の搜索

九月十四日～十一月二日

学用品の給与

九月十四日～九月二十八日

教科書の給与

九月十四日～十月十三日

障害物の除去

九月十四日～十月三日

## 簡易水道の復旧

〈給水人口〉

|            |              |           |
|------------|--------------|-----------|
| 王滝村簡易水道    | 一、一七五人（四二七戸） | 十月十一日仮復旧  |
| 滝越簡易水道     | 八五人（二二戸）     | 九月二十七日仮復旧 |
| 九藏簡易水道     | 七五人（二二戸）     | 十月一日仮復旧   |
| おんたけ高原簡易水道 | 二四人（五戸）      | 十月十三日仮復旧  |
| 計          | 一、五八〇人（五五五戸） |           |

## 河川関係

氷ヶ瀬 河道掘削工事継続

床止工ブロック据付工事継続

柳ヶ瀬 氷ヶ瀬トンネル上流部の河道整正継続

## 林務関係

緊急治山事業 上島地区 清滝地区 滝越地区

林道災害復旧 林道春山線 林道黒石線 林道王滝線

## 農政関係

食糧要請 九月十四日～十月四日（二十一日間） 四二、四〇二食

援農 九月二十一日～九月二十八日

希望農家数 一〇戸

稲刈面積 一八三・五アール

援農人員 延九一人

## その他

被災中小企業者に対する中小企業振興資金の斡旋

被災害住宅復興資金の融資相談

被災住宅の応急修理に対する技術指導

緊急生活相談開催

テレビ共同受信施設の早期復旧

仮設診療所の設置

他の機関応援体制

二次災害対策

## 道路関係

県道 仮道（新大又橋左右岸） 工事完了（十月十四日開通）

仮道（迂回路） 拡幅工事継続

松越地区の搜索



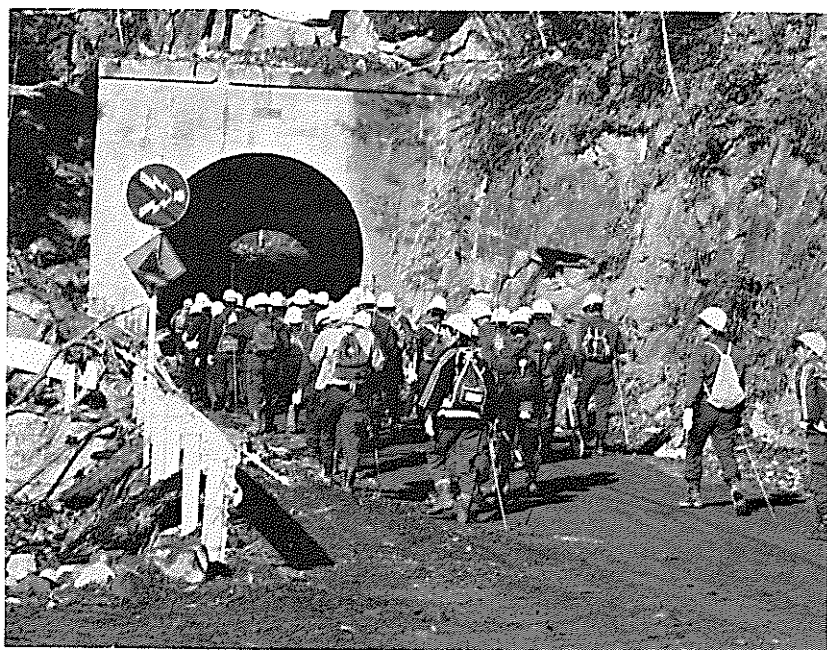
鉄・竹の棒による不明者の搜索





ジェットポンプによる土砂除去作業

柳ヶ瀬地区の捜索







莫大な土石に難航する搜索現場





郡内外消防団の応援





郡内外消防団の応援





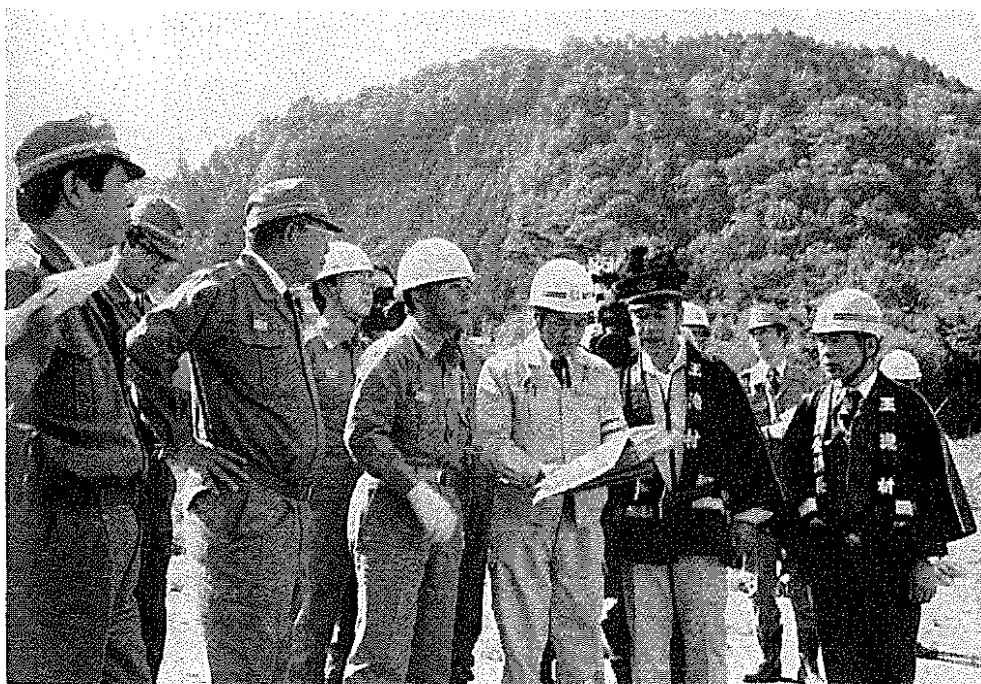
松越地区に集合する消防団員





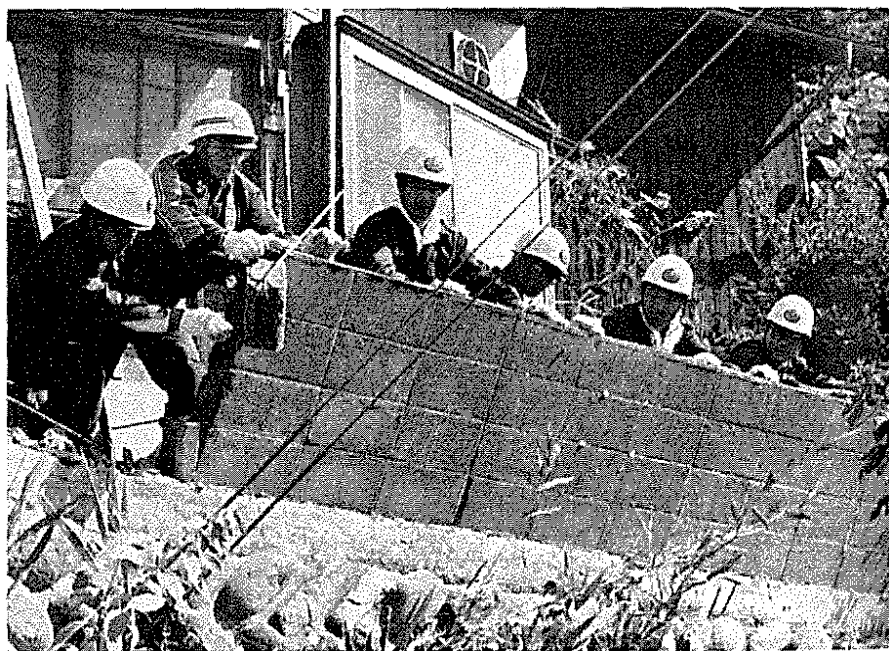


消防庁長官来村



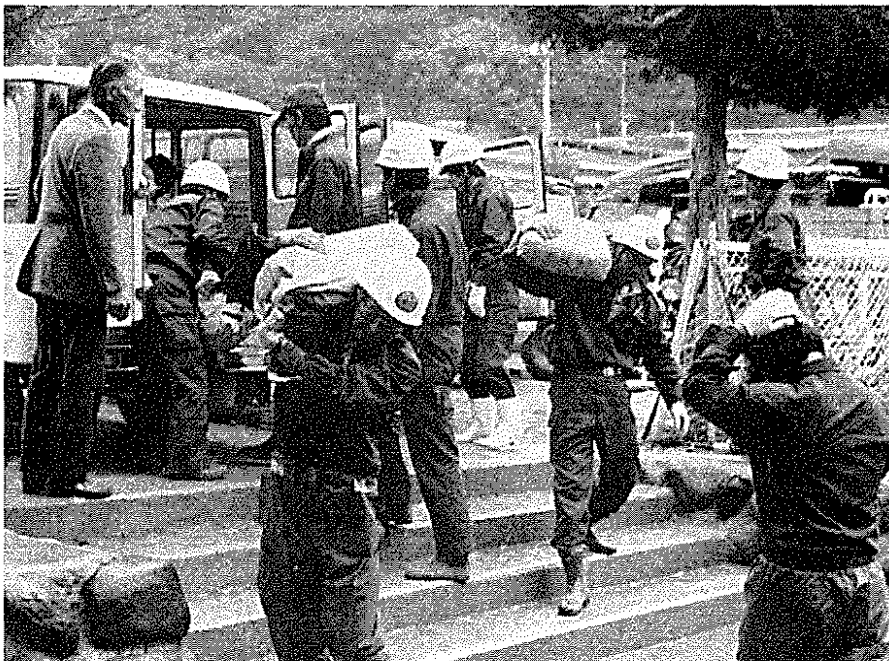
県、村より説明を受ける長官





危険なブロック塀を撤去

## 救援物資の受入れ



各家庭へ飲料水を運搬



各避難所のゴミ収集

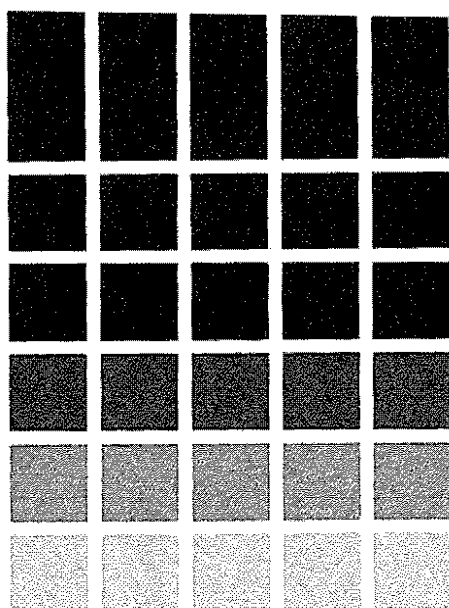




対策本部会議

消防団本部（学校）





# 活動体験記



## 西部地震雑感

木曽福島町消防団長 松岡 功 恭

後に長野県西部地震と命名された王滝村を中心として起きた大地震は、時間の経過とともに予想外の被害を受けていることが判明してきました。

木曽福島町でも、本震および直後の余震のあまりの大きさに、ただただうろたえるばかりでした。直ちに役場職員、本部・各分団で被害調査や危険防止の巡回を始めました。

その日、町長は三岳、開田、王滝村長とともに会議で長野へ行く途中の車中であり、情報の得られないまま塩尻駅まで行って地震のあった事を知らされたものの、その時はまだ、王滝村を中心としたものである事はつきり分からなかったようです。当町では消防指令車を塩尻方面に迎えに向かわせて、やつとの思いで王滝村長さんを村までお送りする事ができました。

王滝村の惨状は、到底筆舌につくせるものではなかったと思います。まもなく一年になろうとしておりますが、今でも大きくえぐられた大地や、搜索に活動する警官・自衛隊・消防団・

地元の皆さん等の必死の姿が目に見えます。そして、頭上に飛び交うヘリコプターの爆音が今でも耳についています。その中で王滝村民の冷静な対応、特に王滝村消防団の皆様の献身的な努力に対し、関係者皆様の活躍とともに改めて敬意を表するものであります。

また、この災害により亡くなられた方々の御冥福をお祈りする次第であります。何よりも心強く思うのは、この地震災害にもめげず、復興にむけて一生懸命立ちむかっている王滝の皆様のであります。今後のますますの御発展をお祈りします。

## 地震について（雑感）

前木祖村消防団長 伊藤 経 夫

五十九年九月十四日、朝食を済ませた私は今日の仕事の準備にかかっていました。その時です、私の方から見れば西方の山の本々から、風もないのにザワザワともゴーともいえず音がしたと思った途端、ドンという大きな音とともに家が倒れるかの如き揺れが来、同時に戸棚の品々が落下し、そのさまをただ呆然と見ているのみでした。何秒かで我にかえりましたが、そ

の間の動揺を今さらながらに恥じる次第です。その後ひっきりなしに余震の続く中で、震源地はどこであるかテレビでの情報を待ちましたが、はっきりした情報を得られず、村の被害状況のこともあり役場消防主任に連絡をとりました。しばらくして、王滝村が震源で被害多大との報告を受けましたが、内容的にはこの時点では不明でした。わが村の被害状況をまとめることもさることながら、電話も道路もすべてがストップした王滝村の現況が何よりも気がかりでした。

午後になり消防主任より王滝村の被害状況を聞き、ただ呆然とするのみでした。何人かの方が土石流の中にいるとの悲報を知り、消防関係のこともあり、再三地方事務所へ電話するも混線のため通じず、はっきりした状況不明のまま一日を過ごし、翌十五日早朝とりあえず現地へ副団長と走りました。途中地方事務所へ寄り、協会幹事長より「今日午前中に日本消防協会より救援物資がヘリで到着するから、また県協会長も先程現地へ向かっているから迎えてくれ」との指示を受け、現地へと向かいました。途中、道路の壊落の中、なんとか残ったただ一車線の林道を恐る恐る進むものの、なお続く余震、ところどころの崩壊箇所、二斗以上もある大石の落下、道路の亀裂、いつまた山が崩れてくるかと、生きたこちではありませんでした。(こ

の時、私は王滝村の地は初めてでした。)

ようやくの思いで現地へ着き、まず松越地区の崩落を見て災害の大きさに驚きの声を発しました。また、この土石流の中に何人かの犠牲者がいると聞き、無情な災害を恨むのみでした。

村役場議場の現地対策本部を訪れるも、ガラスは割れるやら壁が落ちるやらの無残な姿と、間断なくくる大きな余震に驚きのほかありません。霊峰御岳山のこの谷間に、警察官を始め、自衛隊等の救援活動、またそう広くない学校校庭に飛降する何機かのヘリコプターでごったがえす中であって、我が身を省りみず奉仕の信念で活躍する王滝村消防団員の姿を目の前にした時、ただただ頭が下がる思いで、声を大にして御苦労様と言ってやりたい思いにかられました。

その後、郡内を始めとする県下関係消防団の応援出動により、災害根源の伝上川の下流地区に足を踏み入れ、地震の大きさ、恐ろしさをつくづく感じ、私の一生涯の頁に残るであろうと思いました。

捜索活動については省略をしますが、犠牲になった多くの方々に対し、心よりご冥福をお祈りするとともに、王滝村並びに被災者の方々の一日も早い復興をご祈念申し上げて、長野県西部地震の感想といたします。

## 長野県西部地震記念誌にあたって

南木曽町消防団長

新井紀美男

昭和五十九年九月十四日八時四十八分、日本列島のほぼ半分が揺れた「長野県西部地震」。内陸型の地震としては最大級のものといわれ、また「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉そのものの地震でした。その瞬間は大きな揺れと棚からの落下物に氣をとられ、何一つ出来ませんでした。何事もなければ良いがと職場の仲間とお互いの無事を確かめ、「大きな地震だったなあ」「震源地は近いだろうなあ」そんな話をして仕事にかかりました。少しすると王滝村が震源地で大災害発生、行方不明者も出ているという情報。また当町においても、中学校、体育館、その他各地に被害が続々と発生したという情報に、テレビのスイッチを入れ、仲間とともにニュースに見入りました。全員が目がテレビに集中し、写し出される王滝村の惨状を見て、事の重大さに言葉も出ず、ただ呆然とするばかり。あの平和な村に不意打ちをかけた自然の力の恐ろしさ、憎んでも憎みきれない、またこれ程進歩した社会で、何一つ予知・予測が出来なかった

ことへの心のやるせなさ、何処へもぶつけようのない言葉を吐き、一瞬の内に王滝村を地獄と化した地震が恨めしく、これ程人間が小さく思えたことはありませんでした。当然、消防人である私に招集がかかり、現地へ一歩足を踏み入れた瞬間、テレビ、新聞等を見てある程度の事は想像していたものの、あまりの状況に、正直を申し上げるなら手のほどこしようなないの一言でありました。私も木曽の生まれ、王滝村へは仕事にレジャーに何度となく訪れ知っているつもりでいましたが、今、目の前は変わり果てた赤い土だけが異様に浮き上がり、見る影もない様に、自分の頬を抓り、夢ではないかと疑い、夢であってほしいと願い、それが現実のものであったことに二度腹が立ち、胸が締めつけられる思いでありました。当然、南木曽町消防団へも行方不明者捜索応援の依頼があり、町長の過去に受けた御恩の御返しをしてこいという激励を受け、木曽郡下消防団員とともに、(四日間当町出動人員三百五十名)少しでもお役に立てばと行方不明者捜索に出動した訳です。団員諸君が自分から出動を願ひ、現地においては厳しさの中に身体中に気魄を持ち、休むのも惜しいままに泥だらけになって捜索する姿、私は消防人の姿を今ここに見させていただきました。また王滝村消防団においても団員が長期間の疲れも見せず、我々の世話、作業行程、

ありとあらゆることを地域のひとともに活躍され、地域のために働く勇姿に私は感激をしたいと思います。それにしても今回の大地震、自然の力の恐ろしさを痛感するとともに、その自然を破壊するのは人間であることを忘れてはならないと思いました。本当に「天災は忘れた頃にやってくる」のでしょうか。この言葉には疑問があります。この痛ましい災害の教訓は、多くの犠牲者の方々のためにも、我々残された者の使命として活かさなければならぬと思います。最後に王滝村地域住民各位、消防団の増々の発展を御祈念申し上げるとともに、犠牲者の方々の御冥福を心から御祈り申し上げおわりとします。

## 長野県西部地震救援活動状況

日義村消防団長

中 川 勝

昭和五十九年、九月十四日午前八時四十九分頃、マグニチュード六・九（後に六・八に訂正）の地震は、王滝村を中心にして今までに経験したことのない大地震であり、行方不明者二十九名、重軽傷者十名、被害総額二百四十億円（王滝村役場発表推定）という大きな被害をもたらした。

当、日義村においても人的被害は無いものの、住宅の一部破損七棟、道路の決壊一か所、その他石積み、墓石等にも被害が及んだ。

消防団においては、発生と同時に幹部団員を招集し、村内の被害見回り警戒にあたり、二次的被害の早期発見に務めた。

一夜明けた十五日、七時十四分頃、マグニチュード六・二の大きな余震があり、前日同様村内の見回りにあたるなか、村当局と相談のうえ、震源地の王滝村、三岳村へ御見舞に訪れた。その道中でも腹の底から突き上げるような余震が続いた。丁度、スポンジか豆腐の上にでもいる感じである。

余震があるたびに道路の上の方からは、小石がバラバラと車の前に落ちる。当日は東地区の現場を見てきたが、冬山のなだれは何度か経験している自分ではあるが、この土石流には驚くばかりか、自分の目を疑うほどのすごさだった。

村内に入り、家屋には被害は少ないように見えたが、いったん役場に入り、またびっくりした。ロッカーは倒れ、棚の物は何もない。土壁も落ち隣の部屋が見える。その部屋もまた同様である。

村の職員の話では、「これでも歩けるように片づけた。」との事。王滝村長、議会議長に御見舞申し上げ、王滝村を後にして

三岳村へ向かった。三岳村庁舎も五年程前に建設したばかりなのに、タイルの壁は剝げ三階の水道タンクは落ちるわで、地震の大きさに改めて驚くばかりであった。

王滝村消防団長からの要請で、当消防団も九月二十三日、約四十名で東地区（大又川と王滝川の合流点）の行方不明者の搜索にあたったが、そこまで行くのがまた大変であった。まるで田の中のふませのように、脛、太股まではまりこむのである。これでは、搜索どころではない。自分の体をいかにして動かすか、また立っているかが精一杯である。二班で搜索にあたることにして、一班はスコップで土石、いや泥をすくいのけようとするが、またそこへ泥がといった状態で、とても前へ進むことなどできない。二班は一層以上もある竹の木で泥の中へ刺し込むがこれが全部するすると入っていく。何か硬い物にあたるとそこを掘ってみるが何も出てこない。これのくりかえしである。一時間もすると、団員もくたくたである。作業中も余震は続き、その度に前方の大きくくずれた現場を見上げ、それ以上くずれない事に、皆でホッとする。一日の作業を終え、そのあとを見ることが五層も進んでいない。人間の力の小ささをつくづくと感じてしまう。

二十四日は、西部地区（氷ヶ瀬から柳ヶ瀬）方面へ消防団とし

ては日義、山口村消防団に初めて搜索に入るよう要請があり、約九十名で進入を開始したが、これまた大変であった。隊の進む前、道なし橋なしで、まず橋をかけなければ進めない。山から木を切り橋をかけて前進するが、前日同様どろどろの中での作業である。

この日は柳ヶ瀬の手前まで行くまでに二時間も費した。やっとの思いで現場に着くが、もう搜索どころではないほどに団員の腰から下は泥だらけで疲れはててはいるが、被害者の家族の事を思うと、疲れたなどとは言ってはられない。一休みして搜索にかかるが、前に行こうとすると腰まで泥に埋まってしまう。人間腰まで埋まると身動きできなくなり搜索どころではない。近くの団員が山から木の枝を切り、その前の人に投げてやると、それにつかまり、はい上ろうとするが、また枝と一緒に沈む。また投げてやりはい上る。そのくりかえしである。この様子を回りで見てみると誠にこっけいに見えるが、本人は必死なのである。

その後三十日、十月の七日と延べ四日間にわたり、百名の団員を行方不明者の搜索にあたらせたが、責任者としてけががないように、また二次災害がないように務めることができたことをなによりと胸をなでおろしています。



搜索にあたり、日義村消防団としては不明者の発見はできませんでしたが、各団員の真剣なる搜索活動に感謝するとともに、不明者の冥福を祈り、筆をおきます。

## 王滝地震について

前大桑村消防団長 勝野 誠 吾

一昨年の水害に続いた運命の日、九月十四日、大きな地震鳴りとともに我が大桑村にも突然の地震が襲ってきました。何事が起きたのかと思っているのもつかの間、数秒数分おきに起こる余震の数々、ワラをもつかむ思いでニュースを聞けば、震源地は山梨県だとか飯田とかと右往左往しているうちに、御岳山周辺の王滝村と判るまでに数時間かかりました。早速村役場へかけつけ、村長と防災担当者で村内巡視に出かけたところ、大桑村内でもいたる所、被害の続出でありました。王滝村の山伝いが大桑村であり、村内には阿寺断層という大きな断層が通っているため、有感震度もなおさら強いわけです。道路通行中落石により自動車が破損、負傷者二名、屋根家屋の破損三十四戸、水道施設一箇所、農業関係五箇所、商店八件の被害で何とか済

みましたが、地震の恐ろしさを身にしみて感じた次第であります。翌日の九月十五日、王滝村がひどいと言う事で、村長以下議長、主任、私とで早速御見舞申し上げに王滝村へ参上致しましたが、途中三岳村で落石に遇いストップ、王滝村へ近づくとつれ、その惨状にただ驚くばかりであり、直下型地震の凄まじさに呆然と致しました。滝団長以下、寝ずに御苦労なされた対策本部の皆様の御顔が、今も眼前に浮かんできます。また、日本消防協会よりヘリコプターで救援物資が来ると言う事で、県消防協会長、郡協会長とともに、校庭で数時間待ちましたがなかなか着かず、先に帰って来てしまった事も今は想い出であります。長野県西部地震と命名されたこの未曾有の地震に、早速当村も応援体制をとり、三日間で計二百十名の応援出動ができた事は、同じ木曽郡に住む消防団員として当然の事であり、一日も早い復旧と行方不明者の発見を祈る毎日でもありました。今更ながら、あの大又川の東地区現場の土砂崩壊と氷ヶ瀬、柳ヶ瀬地区の土石流の凄まじさを見るにつけ、搜索は至難の業と思いましたが、大又地区で全員の行方不明者が発見されたことは、不幸中の幸いでありました。また、未だ土石流のガレキの下に眠る十五名の犠牲者の皆様には、心より哀悼の意を捧げる次第であります。この未曾有の地震災害を体験した木曽消防協

会、並びに王滝村消防団は、日本消防協会の皆様に、また国民に貴重な体験を報告し、災害列島日本の今後の教訓として、防災体制の確立を、声を大にして呼びかけましょう。

一日も早い災害復旧を祈念致します。

## 長野県西部地震にあたり

山口村消防団長 楯

守

昭和五十九年九月十四日午前八時四十八分、木曽郡王滝村を震源地とする、マグニチュード六・八という大きな地震が発生しました。幸い山口村に置いては、強い揺れを感じたものの人身への被害もなく、家屋についても壁などに亀裂を生じた住宅が一部あった程度の被害でありましたが、地元王滝村では地震と同時に発生した大規模な土石流により、死者行方不明者二十九名と大惨事を耳にしまして天災の恐ろしさを感じたところでありました。私も八月には王滝村へ十日ばかり仕事に行っていました。静かで平和で良い村と思い、あの出来事が起きるとは信じられませんでした。そして、発生数日後、村当局関係者と王滝村へ見舞に出掛けましたが、以前の王滝村とは違った様

子に、また土石流の多量な事、どす黒い水、流木を見て初めて地震の大きさを新たに知らされました。そしてこの大きな災害は全国の皆様に新聞、テレビで知らされ、王滝村のひとさが良くなかったと思います。そして発生以来地元消防団皆様の働きに御苦労様と心から申し上げます。

数日後には木曽郡消防協会にて捜索にあたり、山口消防団も九十名の消防団員を応援出動させましたが、被害の大きさにおどろくばかりでした。そして多量の土石流の中を二層程の鉄筋棒また竹の棒でさぐり捜索したわけですが、土石流の深さに、とても歯がたたなかった事が残念でした。またあの多量の土石流では太平洋でさがす事と同様、人力ではとても無理な事とつくづく感じさせられました。でも王滝村消防団、また木曽郡消防協会はやるだけの事は一生懸命尽くしたと思います。そして今日の災害を土台に、我々消防団は防災訓練をより一層勉強し、非常時に対応できるかまえを日頃から身につけておかねばならないと思いました。

最後に被害を受けられた王滝村が、以前の王滝村より一段と良い村に復活できる事を御祈り申し上げます。

## 西部地震を体験して

前消防団長

滝

正昭

昨年九月十四日、突然この村を揺るがせ、尊い人命を一瞬の内に奪い、建造物、道路等に多大な被害を与えたあの長野県西部地震が、早いものでもう一年になろうとしています。先日復興なった県道新大又橋を通りながら、今なお残るその爪痕を改めて目にして、復興の早さに驚くとともに、今更ながら自然災害の恐ろしさを痛感し、自然の力の偉大さを感じました。

当時団長として、事後処理に当った私にとりまして、あの災害はまったく突然であり、長い消防団の経験の中でも、未だに忘れる事のできない大きな災害であり、大変な体験でした。おきた災害はもとより、これに対処する事すべてが初めての事であり、当初はとまどいと興奮状態の中での対応であり、いささか冷静さを欠いた中での指揮ではなかったかと、今考えると冷汗の出る思いがしますが、あの時は本当に無我夢中で過ごした、一か月半余りの日々であったと思います。時間の觀念もなく、ただ明るくなり今日が来て、暗くなって今日も終わったとい

う感じて、一日一日が過ぎたというのが実感でした。火災、あるいは水害等の短期の出動にも、団員の安全にはずい分神経を使うものですが、このような災害においては、いつ終りになるのか見当もつかず、ただただ今日も全員が無事に活動出来るよう祈るような毎日でした。

今、こうして文を書きながら思い出すのは、団員の皆さんの汗と泥にまみれての捜索活動の姿であり、各種の警戒任務に、救護物資の搬入配布に、その他あらゆる雑務に、黙々と働く無精ひげの中の疲れた顔々です。団員の皆さんには、長期間にわたり献身的に不平不満ももらさず、本当に良く頑張って頂いたものと、今でも感謝の気持で一杯です。これも団員の皆さんの日頃から消防活動に対する責任感と深い理解、そして自分の村を守り村民を守るといふ消防精神の現われであると信じます。と同時に、こうした活動がスムーズにできるのも消防団という組織があればこそで、一人の力ではできない事も、その力を組織に結集すれば、一人が二人に、二人が四人の力も出し得るものです。今回のこの貴重な体験を十二分に生かし、今後起こり得る不測の災害に備えて、消防団組織を、より大きく生かすためには、団員一人一人が、自分の地区の人員、家屋、地形等実情を常に正確に掌握し、より正確な情報を基にして、迅速

な団体行動をとる事が、村民の期待にそえる活動となって表われるものと信じます。今後ともより充実した消防団を作り上げて頂く事を念じてやみません。

終りになりましたが、県消防協会の皆様方、なかでも木内県協会長には何度もこの山村まで足をこんで頂き、激励の言葉を頂くとともに、多大なる御見舞等賜り厚く御礼申し上げます。また、田口郡消防協会長を始めとする郡消防団の皆様方には、長期にわたっての支援活動の他、数々の御厚情を賜りました事、併せて厚く御礼申し上げますとともに、日本消防協会、県下各消防団、全国消防関係の各位におかれましても、数々の御厚情に対しまして衷心より厚く御礼申し上げます、西部地震消防団記念紙寄文とします。

## 長野県西部地震災害体験と教訓

王滝村消防団長 村 木 與 助

冒頭、昨年の長野県西部地震災害に対し、日本消防協会をはじめ全国消防関係団体、消防に携わる皆様方から賜りました数々のご援助ご厚情に衷心より感謝申し上げますとともに厚く御

礼申し上げます。

山村の静かで穏やかな地に、昨年九月十四日、何の前ぶれもなく、突然襲ったあのいまわしい大地震。住民のショック、恐怖心は物凄く、村がどうなるだろうかという不安、何回となく続く本震と変らない余震（十五日午前七時十四分、M六・二、午前七時三十九分、M五・六、午前九時にも大きいのがあった。十四日十五日両日で九百七十八回を数え、うち有感は十七回）など、当時の様子は、一年二か月経過した今も、生々しく蘇ってくる。

昭和五十一年から御嶽山を中心に発生していた群発微小地震、昭和五十四年十月二十八日の御嶽山の有史以来の噴火（水蒸気爆発。村には直接被害はなかったが、間接的には御嶽山登山が一年間規制されたことの影響が大きかった）と続き、昨年の地震が発生した。噴火の時、御嶽山中腹に地震計を設置して、村役場で観測をしていたが、火山噴火予知連絡会の安全宣言が出され、昭和五十六年三月に、この計器は撤去された。この計器があったならば、前兆がキャッチできたのではないかと私達は感じた。王滝村が「特定観測地域」に指定されていたことは知るよしもなかった。しかし内陸型直下地震は、予知が困難であるとも言われているが、地震国日本の予知技術は世界的にも高く評価されており、今後一層の研究もされることだろう。

村民は、いままでに何回も群発地震を感じていても、当地は岩盤がしっかりしているから大丈夫であると安堵感を持っている人が大半であった。いざ大地震に遭い、地質が火山噴火物で構成されている脆弱な地盤だったことが判り、今更ながら啞然とした。自分の住んでいる所の地質分布状況を知り、危険箇所等を点検し、どのような被害になるのか、避難方法も検討する必要を感じた。

発災時は(私は当時副団長)、木曽福島町の病院に居り、巨大な四階建のコンクリート建物が激しく揺れ動き、ベンチの下へ潜り込もうにも入れない。ニュースは「甲府震源地」との放送をしていたが、私は直感で、群発地震のことが前から脳裏にあり、これは王滝であると判断し、すぐに電話をかけるが通じず、車を村へ走らせる。道路は落石、亀裂があり、避けながら車を速めるものの、状況はだんだん悪くなるばかり。途中、三岳村では屋外スピーカーで地震の状況放送をしているのが聞こえた。わが村は有線放送使用であるが、災害時には同報無線施設でなければだめであると痛感する。村の入口まで来た時、大又橋付近で大規模崩落があり、県道は決壊して通れない。バスもそこで止まったまま。T建設会社の従業員の車が引き返してきたので様子を聞くと、「村道一号線(牧尾ダムの対岸)に行くよりしか

たがない」ということで、迂回し急ぐ。また一步手前で、巨岩が道路を塞いでおり、役場職員が道路状況を視察にきていて、そのオートバイで乗り付ける。

住民は狼狽している、廻りの石垣は決壊している、各家庭は相当いためつけられている、我が家も戸は倒れ、家財は足の踏み場もない程氾濫し家の中へ入れない、これからどうなるか路頭に迷うほどであった。病弱な父親はずうっと寝ていたが、タンスが倒れ下敷きになっているのではないかと心配したが、家内の誘導で助かり、学校校庭へ避難していると近くの人に聞き安心する。もっとも簡単なことですぐできる家財の固定をしておけばなんでもないことを、してなかったため被害を受けた。全国どの家庭でも、今後実施して欲しいと感じた。

私は取りあえず役場へ駆けつけ、滝団長(当時)と逢いこまかい状況を聞き、対策本部を設置。村長が出張中で不在なので、助役(副本部長)、消防団長が協議検討し、避難指示を発令した。判断の理由は、大きな余震が続いていること(野口地区)、裏山に亀裂が入り崩れる心配があったこと(下条、上条、東、幕島地区)、有線放送の故障などにより広報手段がなくなり、住民を地区ごと一定の場所に集めておくことにより、状況説明や指示を統一的に行うことができるということの実施をした。



消防団はポンプ車により、出火防止、避難指示、誘導、また被害状況の把握、道路通行不能地は徒歩で、ハンドマイクを使用してやっている。昼頃四十名程団員は集まっている。S副団長も村内警備中。

役場は騒然としており、中へ入れない。余震はやまない。屋根瓦は落ちてくる。各消防団員からの報告は屋外で行政無線にて受ける。「消防団員の父親の行方がわからない。誰か見た人はいないか」といつてくる。三人の団員に指示、近くの聞き取りに出す。結果は行方不明になっていることが判明する。何とも言えない気持ちになる。本当にお気の毒である。学校避難所から、「役場の裏山が崩れかけているが大丈夫か」と問い合わせがあり、私は知らずにいたが揺れる度に崩れが大きくなるのを見る。しかし、状況が判らず危険なため、団員は、時に様子を見てということで出動させない。

八海山（御嶽登山道五合目）スキー場へ作業に行っていた森林組合職員が帰ってきて、「清滝山荘（三合目）が土砂で全滅である。土砂が十二権現より鼻戸と清滝へ流出し凄惨な状況だ。我々はどうにか下山してきたが、鼻戸の小谷のバアちゃんの安否が判らない」と報告が入る。小谷家の人にも心配でやってくる。「俺、これから行きたいが」と言われたので、団長と協議し午後一時

三十分頃、K、M両団員と家族の人と現場へ。「道路状況がわからない、樽沢林道を通ると良いかもしれない。夜間になるかもしれない。くれぐれも注意し無理な行動はとらないよう」充分指示し、無線機を携帯させ救出に向かわせる。午後五時頃、管理センターより、「無事だ」との一報があり一安心する。午後三時三十分頃、村道一号線が巨石が除去され開通になり、松越地区（大崩落があり森林組作業場流出四名、大又川沿にある生コンブラント場で八名、通行人一名と、この地で十三名が土砂に呑み込まれる）で家に居て、地震で家と一緒に百斤ほど流された（家は半分壊れる）が途中で幸い止まり、一命をとりとめたが、ケガをしたM婦人を本曾病院へ送るため、消防車を先導させ、二子持地区（途中）まで誘導する。

学校校庭には、村民の大半が集まってくる。どの顔を見ても青ざめ、不安と恐怖の様子。何とも言えない雰囲気である。午後四時、村長が帰り、対策本部会議が開かれる（団長出席）（県現地本部は九月十六日設置される）。我々は学校校庭に避難している住民の、夜間の対応について各自治会長（区長）に集まっていた。だき、施設が狭いため小学校体育館（建築後五十年経過、木造で地震で壁ががれた程度。中学体育館は鉄骨造りのため天井が壊れ危険なため入れない）と保育所に分散して泊るよう指示する。一

部被害の少ない中越地区、営林署地区は自宅待機させるが、一緒に泊る人も多かった。

学校の他の避難所は、国民宿舎、孤立した滝越地区、二合目建設会社社長宅、名古屋市民休暇村、二子持百草販売店が当てられた。

ライフラインの関係で道路は開通、村の中心地の孤立化を免れ、電気、通信の復旧も夜には一部完了、水道も近隣のタンクローリを使用、食糧はガス等火気使用制限のため炊き出しになる。役場住民課が担当する。

消防団員も夕方になると九〇％集まる。団員の招集は、団長談によると、発災時は、停電のためサイレンはだめ、有線放送も自家発電装置が倒れ使用不能、半鐘を鳴らしてみたが効果はなかった（団員は地震で揺れる最中、火の見やぐらへ登り打鐘する。必死である）、自主的に分団ポンプ車庫に参集した団員が多く、一度はポンプ車で役場へ集合（各車庫に行政無線機塔載）、各分団、管轄区域ごとに情報収集活動に入り、出火防止、避難誘導指示伝達、誘導も行った。

消防団本部は小学校（一・二年の教室）に消防団詰所として設置。団長が朝七時～八時、十六時と一日二回の対策本部会議出席後、分団長以上の会議を開き、報告にもとづき協議、班編成

やその日その日の活動を決めた。

十四日の夜は県警と協議、交通規制、危険箇所への立入禁止、避難した関係で家庭が留守になり警戒の必要で、班を編成し徹夜であたる。炊き出し、毛布などの救護物資の配布も実施、各自治会長に依頼し、自分の地域の住民の安否について確認をお願いし、実態を掌握する。

自衛隊は小学校教室、県警は営林署の寮が宿舎に当てられる。夜は板床で寒く、また地震の恐怖もあり、どの団員もほとんど寝ていない状態であった。

一夜明けた十五日早朝より、自衛隊は行方不明者搜索、孤立地の避難誘導に動き出す。我々消防団も点呼後、二日目の活動に入る。九蔵地区が道路状況が悪く連絡など十分できないため、国民宿舎へ団員が指示誘導する。滝越地区は村の中心部より十二キロ離れており、土石崩壊で一名の死亡が確認されたが、孤立状態であり、営林署職員、林業作業員、観光客、地区の人をヘリコプターで全員学校へ運ぶ。同地区は消防団員がいないため、消防団を定年で退職したOBと地元婦人で構成された自衛消防隊を組織し、一旦有事にと備えている。結成以来現在十年になろうとしている。今回の災害の避難誘導はしなかった。また消防団の可搬塔載車を同地に常駐させ、管理委託契約を結び、消

防団が駆けつけるまで使用し消火をお願いしている。大又地籍も「土砂がどンドン崩れている」との情報で、消防団員が案内役で一緒にヘリコプターに乗り、二合目地区の人を避難させる。後で確認したら心配はなかった。

名古屋市民休暇村に避難の観光客、住民もヘリコプターにより救出される。学校校庭はそれぞれの地区からヘリによる避難者がおりてくる。ヘリのありがたさを感じる。

八十歳以上の高齢者、病弱の人を木曽福島町老人憩の家へ一時避難させるため、六十九名をヘリコプターにより輸送する。消防団員はヘリポートで老人を背負ったり、乗る手助けをする。老人に一抹の寂しさが感じられる。

同日午後、郡下各消防団長、木内県協会長が現場視察に訪れる。日本消防協会では魚谷常務理事を筆頭に、ヘリコプター二機で飛来、緊急ろ過器二台、食料品、見舞金を早速届けて下さる。飲料水も近隣町村の貸与タンクローリにたよっていたが、このろ過機の活用でスムーズにできるようになった。日本消防協会の素早い対応は誠にありがたく、感謝の念で一杯でした。

住民の一部は村外の親戚へ避難する姿も見られる。私の家族も家内の実家へ子供三人と一緒にいく。父親は老人憩の家へと王滝を離れ、残るのは私一人となり、消防一筋に身を入れるこ

とができる。消防団員の家族の一部も村から離れ、消防活動に懸命に取り組んだ。特に団幹部（分団長以上）は十一日間におよぶ間、学校本部に泊り込み指揮をした。

災害規模は、発震時には完全に収束することができず、翌十五日になり、ようやく被害状況、行方不明者が判明するという状態であった。自然の猛威はもの凄く、御嶽山中腹（海拔約二五五〇㍎）で大崩落が発生し、伝上川、濁川を土石流が落差千五百㍎、距離にして約十二㍎の間を猛烈な勢いで下り、柳ヶ瀬地区を全滅にし、王滝川を氷ヶ瀬まで埋めつくしてしまった。途中、狭隘部が数箇所あり、氷ヶ瀬地区で土石流が止まり、下流地区に被害がなく幸い。推定土石量約三千三百万 $\text{m}^3$ と膨大な量で、柳ヶ瀬地区には高さ五十㍎、延長三・五㍎というえん堤の天然湖（約三百六十五万 $\text{m}^3$ ）ができた。

関西電力の送水管が壊れ、多量の水が流れ出て、氷ヶ瀬地区の営林署貯木場の材木が流出する。偶然にも氷ヶ瀬地区で発生した作業所の火災は、消防団にも出動要請があったが、道路決壊などで出動できず困っていたが、同流水で消えた。送水管は管理人二人が、自衛隊員の指導で同体にロープをつけ、着地、止めた。水害もこれで治まる。

十六日、役場裏山の崩落箇所も学者が上空から調査、現地調

査で安全確認ができたが、亀裂が幅八十センチ、長さ十メートル、深さ二メートル五十センチとかなりの規模で何箇所もあり、M分団長の指揮で十四名が出動、降雨に備えシート三十枚を担ぎあげ、かぶせ作業をする。同地区も含め、崩落地、地すべり等危険箇所には、伸縮計を設置し観測も行う。道路決壊箇所等には、防止のためシートを貼り、土のうを作りシートを抑える。屋根が壊れ雨濡れの心配のある家屋で、手がたりなくてできない所には応援もしてやる。種々態々な雑務も飛び込んでくるが、消防団としてはやってやらねばならないことばかりだった。

十七日から消防団も行方不明者捜索に加わる。第三分団が最初担当、皆がはじめての事であり、ゾンデ(棒)で捜索をするが、なにしろ広い現場であり、膨大な土石量で、土砂はかなりぬかるんでおり、ある時は腰まで入ってしまいそうになり、思うように活動ができない。土面に棒を刺し、感触、臭いをたよりにスコップで掘ったりして捜索する。棒をはじめ竹ザオを使ったり、太かったり割れてしまったりで鉄筋を二メートル位に切り使用もした。土砂に滑り込むため、合羽のズボンを靴にしぼりつけたり、いろいろ工夫もしてみる。安全靴をゴム長靴に替えもした。余震も大きなのが襲う。落石、土砂流出警戒のため、無線担当も分団長の傍につけ、本部とも常に連絡を取りながら行う。

連日連夜の出動で、団員に疲れも見られる中で、木曽消防協会(王滝も含め十一町村消防団で構成、田口上松消防団長が協会長)の内、近隣中部ブロック(木曽福島町、上松町、三岳村、開田村)の四団が九月十九日から九月二十二日、また郡全消防団が九月二十三日、二十四日の両日と九月三十日、約二千人応援出動、捜索に協力をいただき、懸命な活動には頭の下がる思いであった。関根消防庁長官も九月二十二日に、ヘリコプターで来村、現地視察され、我々消防団員に力強い言葉で激励を賜り、活動の励みになった。

十五日一名、十六日四名、十八日二名と遺体が発見される。人力に加え重機(バックホー)が投入されるが、なにしろ軟弱な土面で、ヘリコプターで踏板を数百枚敷いたり、凝固剤を使用したのが、三十センチしか固まらず、重機の重さには無理であり、反面「ダムは飲料水として利用されているから困る」と水資源公団よりクレームがついて、水質検査をすることで了解を得て実施したが、前記の通り効果はなかった。流出した木材を重機で集め、それを敷きながら徐々に自走、前へ進むがなかなかいかどらない。ある時は重機が滑り込み、重機同志の助け合いで時間が費やされることも多く、重機の数も一日五〜六台から二十台の投入にもなった。土砂を移動しながら重機の捜索も続け、

ジェットポンプによる土砂除去搜索も試みたが（消防団、自衛隊で行う）除去も一日わずかであり、人数を多く要し、結果はよくなかった。このポンプ使用には高額な費用が必要なため、厚生省の許可を受け実施した。幸い台風もなくてよかったが、降雨時には行方不明者がダムへ流されたのではないかとということで次の日ダム周辺、ダム湖にボートを浮かべ搜索し、一遺体は湖面に浮いている状態で発見もされた。松越地区では十月十八日、最後の一遺体が収容され、行方不明者全員を発見することができた。

一方、大量の土砂に埋っている、氷ヶ瀬、日向瀨、柳ヶ瀬、濁川地区も九月二十日から搜索をはじめているが、面積も膨大で、苦難続きのところ、九月二十八日、消防庁官の指示もあり、県協会長はじめ県下の大北、南安、松筑、上伊那、飯伊の各協会の正副協会長が王滝へ参集、現場視察後、応援について協議をする。我々消防団としては、対応が大変であるのと実際に活動ができないということで、当初は極力辞退を申し上げたが、話し合いを重ね「現場を見ていただくだけでも良いのではないか」と考え、好意を受けた。大規模災害時に対する応援協定が、昭和四十一年五月二日に関係各市町村と締結されており、その面からも今回の運びとなった。実施日は、十月七日（日）で

総員約千人の出動をいただいた。村の人口に匹敵するほどの団員数であり、事前に団としての受け入れ対策を十分検討、準備をする。特に事故があつてはならないので、その点に一番気をつかう。総指揮はS副団長、各部隊にはそれぞれ正副分団長を配置、無線担当団員もつけ、現場との交信、状況掌握に心掛け、対応した。県下南端北端と、遠方から早朝出発して来村いただき、搜索活動に当ってもらったわけであるが、災害現状を目のあたりにして物凄さに驚かれたことであり、軟らかい地面には大変ご苦労されたことと思い、感謝で一杯だった。全団員を無事に送り出すことができ、ほっと胸をなでおろすことができた。

同地域で行方不明者十五人の搜索は、前記で述べた通り堆積土石の想像を絶する量で、十人は最初にいた場所は確認されていても、土石流でどこへ流されたか広範囲で皆目判らない。名古屋市から釣りに来た五人は、乗ってきた車も見つからず、どこでどうなったか不明である。ヘリコプターで被災者家族の現場視察。人力、機械力搜索も難航する。雨が降れば現状も変わり、橋も何箇所か架けるがその度流されたり、苦勞の連続であった。発見が不可能に近い状態で、搜索も限界にきた救助法の適用が切れる十一月二日、村長が直接被災者家族の方々と話し合った結果、搜索打切りの同意を得て搜索は終止した。家族の

方々の心情を想う時、どうにも言えない気持ちにかられたがしかたがなかった。

咄嗟の判断が非常時にできることは素晴らしいことであるが、この土石流から難を逃れたO氏、T氏の両氏がいた。両氏は地元の地理を理解していて、素速い行動をとったことがあげられる。凄いい地鳴りを聞き、地震で王滝川上流の三浦ダムが決壊したのではないかと判断、山へ駆け登り命を守った。登ってすぐ振りかえるとすぐ傍まで土砂がきていた。いかに土石流が速かったかわかる。両氏は王滝川沿いの林道の柳ヶ瀬地区下のトンネル附近にいたが、同場所に犠牲になった五人がいた。一言大声で同じ行動がとれたならば、あるいは助かることができたのではないかと悔やまれた。瞬間のでき事に対する行動が運命を左右する結果になってしまった。

災害救助活動は、約五十日間、自衛隊延六千五百人、警察延四千五百十八人、消防団地元千二百五十一人、応援三千二百二十八人、計二万七千人、重機八百九台投入し、終了した。自衛隊、県警の皆さん、重機のオペレーターの皆さんの捜索協力ありがとうございました。

この地震は、日本でもまれな、大規模土砂災害で、村内五箇所で土砂崩壊が発生、二十九名の尊い生命が奪われてしまった。

家屋も十四戸全壊で、その多くが土砂崩壊によるもので、半壊七十三戸、一部壊五百十七戸と村内全域で大なり小なりの被害に遭った。被害額も農林業、土木、商工、教育関係で約二百二十七億八千万円と、村の予算十年分に匹敵するほどの額になり、国有林野関係も百八十九億七千四百万円にのぼった。

地震が発生すると火災が起こりやすいと言われているが、幸いにも前記の水ヶ瀬地区営林署作業所一棟全焼したにとどまり、民家にはおよばなかった。発災時が午前八時四十八分と、火気使用中の人が少なかった点と、後日の調査でも、火の始末をしたり、ガスの元栓を締めた人が多かった。地震時にはまず「火を消す」という常識を実行したからである。

しかし、現実として大きな揺れの中で、自分の体を守るだけで精一杯で「火を消す」ということは至難であるが、やはり、これだけはやらなければならない事であり、誰でもが心掛けておく大切な事である。ガスはプロパンガス使用であるが、発災後すぐ業者が全家庭をくまなく廻り、点検証を貼り、その後使用するという処置をとった。

消防団員も、総員百二十人で、その内四十人を役場職員が占め、実動八十人で今回の活動をしたわけであるが、延五十日間におよぶ日数の中で、最高三十日、一人十五・五日の出動になっ



た。団員も自分の家庭が被害に遭い、片付け整理もしなければならぬのを返上し、家族の理解もあり、また消防人としての使命感があり、幹部として団員の健康を配慮し、一週間後には一日おきの交替制、都合や諸事情のある人は申し出て休むよう指示もしたが、団員それぞれ熱心に出動した。この裏には、会社、事業所などのご理解、ご協力の賜であり、長期間にわたる活動の中で、団員にケガ、病人が出なかったことは、団をあずかる幹部として大変うれしく、感謝申し上げます。

村も我々の出動が長期化し、苦勞であったことで（災害活動には手当てがない）、村条例を改正し「五日以上の災害出動には一日四千円を支給する」という配慮をいただいた。

前後するが、震災後の四日目の十七日、丁度国土庁長官を委員長として政府調査団が来村した日、情報伝達で問題が発生した。その一つは、御嶽山からの土砂流出でできた天然ダムなど附近の状況視察観測を、自衛隊のヘリコプターで毎日実施していたが、当時パイロットが替わり「ダムの水位が変化、土砂が流出した。様子がおかしい」と対策本部に連絡があり、検討の結果、ダム下流地域住民に有線放送、消防車で「ダムの様子に変化した、避難準備をするよう」広報したところ、住民は避難指示と想い、急いで山へ登ったり、高台へ避難し、一時混乱が

生じた。ヘリコプターに大型スピーカーを急遽取り付け、広報をしておいた。もう一つは、やはり同日「役場裏山が決壊する」という報道陣の情報で、近くの住民が避難する事態が起きた。

デマ情報と後日いわれたが、このことは、実は報道陣が現場取材中、山から余震により落石があり、これは山が崩れると思い騒ぎ出し、近くの人に伝え、消防団にも連絡が入った。本部へ連絡する間もなく、また現場確認も先にしなければならぬが、住民も騒然としており、災害がもし発生したならば困ると判断、一部地区に避難指示を出し、すぐ現地調査し安全を確認し解除した。特に地震ショックで住民が動揺している時の情報伝達は、正確な伝達文により十分注意する必要性を痛感した。

私達は今回このような大規模地震災害活動で、いろいろな体験により教訓を得たので、一端を述べてみたい。

#### 一、観測、予知体制の強化

地震は山岳地域か、都下部の直下か、海底で起きるか、

また、どこへ、いつ、どの程度の規模で起きるか、観測体制が充分なされ、予知ができれば最高である。

日本の予知技術は世界トップクラスである。観測、予知体制の確立、実施が必要である。

## 二、地震によるガケ崩れ、山崩れの再認識

土石流は大豪雨時に発生するとの認識がたかいが、今回のように地震で土石流、地すべりが起こる。地震による土石流は、自然災害の中でも研究、調査されていないので、地震対策の方法を探る、基礎調査が必要である。

### ○ボーリング資料整理

### ○地質図の整理、地下水位分布図作成

### ○地盤図の作成（活断層、軟弱地盤の層の厚さ調査）

### ○予想震度分布図の作成

### ○地震活動図の作成

### ○土砂災害危険地域の想定

調査により自分達が住んでいる地域の地質を知り、危険箇所など点検する。発生した時、どのような被害になるのか、避難方法などの心構えが必要である。

危険流域の図面作成、住民に配布する。その他いろいろなデータは、市町村がわかりやすい方法で公表、住民に注意を喚起させる。断層が附近に走っているが今回の地震は新しい断層で発生している。

## 三、情報の収集、伝達について

災害発生後、速やかに正確な情報を収集し、住民にも速く伝達する。

伝達には情報無線施設を設置して、定期的な防災訓練を行い、その都度、情報収集、伝達訓練も含め行くと、伝達の送り手、受け手も冷静な判断ができ、咄嗟の場合、正確な対応、行動ができる。伝達文は簡単に明瞭で判りやすい文にする。

恐怖の最中か、ある程度日がたち、周りの悲惨な状況が判った不安な時、デマ情報が生じやすい。

## 四、防災意識の向上

定期的な、自治体と住民がいかに真剣に防災訓練、避難訓練をするかが大事である。

地震、水害、火災などの災害想定訓練も重要である（王滝は過去、消防団の消火訓練、学校、保育園の避難訓練のみで総合防災訓練はしていなかった）。

大がかりな防災対策も必要であるが、今回のように家財転倒による被害が大きく、家具の固定など、すぐできることは実施するとよい。

## 五、防災計画書

昭和三十九年に作成。御嶽山噴火時後の昭和五十六年、五十七年に、県の指導により全面見直し、立派な計画書ができあがっていたが、今回の発災時には地震ショックがあり、自分が何をやってよいかとまどい、また計画も十分理解していなかったこともあり、計画書通りに最初はいかなかった。

問題点は、地震についてはありきたりの内容で、住民も、岩盤が硬く安全だと根拠のないことを信じていた。山地災害対策には孤立化問題について対応する必要がある。土石流、地すべり、浸水被害防止等で、河川整備と並行し、発生予想、危険区域を組み込む必要がある。

現在、メキシコの大地震、コロンビアの大噴火災害が発生、人的物的面で大被害がでています。県下でも長野市地附山地すべりにより、二十六名の生命を奪われ、家屋倒壊と、これまた被害もできました。

災害は起こってはなりません、いつ、どこで、どのような規模で発生するかも判りません。備えあれば憂いなしと言われるとおり、今後防災対制の確立の万全を期す必要性を皆さんに

呼びかけ、終らせていただきます。

## 西部地震

前第一分団長 工藤 伯雄

地震発生時は、勤務先に居ました。突然ドンガタガターと揺れ始めた。「地震だ」だんだん揺れが大きくなり、建物の隅が波打ち横揺れに変わった。危険を感じて無我夢中で机の下にもぐり込み、十数秒で地震は治まったが、ロッカーが倒れ、書類は散乱し騒然たるありさま、一時は呆然としたが、我に返り二階の裏口に出て、学校を見渡し子供達は大丈夫かなと思った。灯油タンクが倒れ油が漏れて危険な状態であり、真っ先に同僚三名ほどで処理し、急遽家に帰り隣近所のガスの元栓を締め、家に飛び込んだ。家の中はタンス家具等倒れ惨憺たるありさまで、消防服に着替え、表の階段を登った。妻がラジオ放送で震源地は甲府ではないかとの事、その矢先「東の森本さんの家が崩れ、なくなった」と伝えた。一瞬王滝が震源地と確認し、役場に戻る。余震は続き、庁舎の二階の瓦の破片が道路に落ち危険な状態で、消防団員が集合し学校へ移動した。その頃は小雨が降っ

ていたように記憶している。間もなく、校長先生のはからいで小一年生の教室が消防詰所と変わった。その後、避難命令が出されて体育館に家族、村民が避難したが、松越地区の県道は崩壊し寸断され、崩越線も崩落で危険であるとのこと、団長命令で夜は消防と警察官とで、主に道路危険箇所を交替で徹夜の巡視をする。翌日家族は新潟の実家に避難した。その後、学校で仮眠生活が始まる。九月十四日から二十三日間続いた。十月二十五日に学校の授業が再開され、家族が避難先から帰って一安心した。第一分団は、重点に柳ヶ瀬、氷ヶ瀬地区の行方不明者の搜索に現場に向いて、自然の猛威を目のあたりにして背筋が寒くなる思いだった。膨大な土石流に襲われ、四十層もあるうか、一面に土石が堆積し、いたる所にヒノキ、サワラ、雑木の幹が何本か折れ、無惨な状況下で、自衛隊、郡下町村の消防団員の応援に止まらず、中心ブロック千余名の搜索は、足元が軟かく膝まで泥に埋まり懸命の搜索を行ったが、残念ながら十五名の遺体を探す事ができず、泥の下に眠られた方々の冥福を祈るのみである。

## 祈り

前下条区長 柴田 藤平

九月十四日、大地震が王滝を襲ってから、はや一か月が過ぎた十月十七日、区長会では行方不明者の搜索に参加した。東松越地区と、濁川、柳ヶ瀬地区方面の二班に分かれ行った。下条区は東松越地区の搜索に当たる。現地午前七時三十分集合。地震発生以来連日、消防団員、自衛隊員、警察の方々、また多くの人達の応援もあり、足場の悪い所もある中を、行方不明者、死者二十九名の中、東地区の十三名の搜索が懸命に続けられ、十月十七日までに十二名が見つけられ、最後の残された一人を一時も早くと祈る心で作業をする。

当日は機械力に重点をおき、その動きに注目しながら鉄棒などで努力したが、その日はむなしく終る。しかし広い面積を、およその見当をつけては機械を動かしてくれる人の話に、「今日はおもう誰も応援に来てくれる人はいないかと思ったら、みんなが来てくれ張り合いが出て仕事に精が出せる」と喜んでくれた。この何処かには、きっと行方不明者がいて、早くここへと呼ん

でいるような気もする。

そんなことも考えながら、また家族の人達の気持を思うと居たたまれない気持になる。一刻も早くみんなと対面でき、安らかに眠ることを念願しながら、区長会の一員として捜索に参加した今日の日を忘れることはないだろう。

## 故泉和視君の人柄を偲ぶ

友人 栗 空 敏 之

まだ弱冠二十四歳という若さで、君はこの世を去ってしまった。しかもあまりにも残酷な形で……。君の生命を奪った相手は、大自然のふるった猛威によってであった。絶対に地震がきても安全と、村民大半が思っていたであろうこの村へ、爆弾は容赦なく落下されたのである。

人間の生命のはかなさというか、あつけなさというか、通常、世間ではいろいろな事故、災害がひっきりなしに起きているが、これだけ身近で起ろうとは誰が想像しえたであろう。友人の命を数秒で奪ってしまった地震は、まるで「悪夢を見ているのでは」としか言いようがない出来事であった。

三年程前のことである。泉君は少々三十代に見えるような特長のある風貌で、いつもと変わりない様子で、笑顔で話しかけてきた。それは、村の若い衆についてであった。急に真剣な顔つきになりながら、これから村は一体どうなっていくのだろうと不安な気持を私に訴えた。青年会長という責任感が一層そうさせたのであろう。熱心にやればやるほど、村の若者の活気の無さに落胆しながら、「オレもチャンスがあつたら、村を出たい」と言つた言葉が、やけにこびりついていて、私の頭からはなれない。青年会の活動では、君は若くして青年会長を引き受けたためだろうか、少しとまどい気味ではあったが、あの独特な口調、言いまわしで回りを啞然とさせたものである。皆、君が言葉を切り出すとシーンと静まりかえって聞き入る。大事なポイントだけをボツンと言言二言、それで通じてしまう。誰もマネのできない泉君ならではのキャラクターであった。

村の若者は、よそへよそへと出て行つてしまつてなかなか帰って来る者がいない。また、若い人に共通して言えることだが、皆、本音で話そうとしない。若者らしさがまったく感じられないのである。そんな中で、泉君は村の将来のことを真剣に考え、本気で青年会活動にも取り組み、友達の輪を広げながら自分自身を磨き、力強く一歩一歩前進していたように思う。君

の村における存在価値は非常に大きいウェイトを占めていったにちがいない。大きなマイナス要因となってしまったことは確かである。青年の船では、同じ釜のメシを食べた仲間として、心強く、真の友として気持が通じていただけに……残念でならない。

君との付き合いは、非常に短い付き合いだったけれど、少なげに語る言葉の端々に力強さを感じ、物事を実行してきた君に見習うものばかりであった。君が言わんとしていた村の若い衆の奮起に期待をし、村の発展を天国から見守っていてほしい。泉君、やすらかに眠り下さい。

## 消防団員として

第三分団 池 本 光 一

昨年九月十四日の突然の出来事から、もう半年がたとうとしている。人の命の帰らないことだけが、日がたつにつれくやまれるように思えてくるのだ。崩れた山や谷の復旧工事がどんどんと進んでくるにつけても、反対にさみしさが深くなる。山からおりてみた中心地は、騒然として、ヘリの飛ぶ音が耳に残っ

ている。すぐに消防団員の任務についた。夜警で村の中を歩きながら、余震の静まらない暗く寒い中でどういう状況になっているのか判らないで不安だった。だんだん情報が入り、大変なことになっていると解ってくると、消防団の力のはるかに及ばないことになり、気持を納得させようと無理やり思ってみてもだめなほど、壊れたがひどすぎる。一人ではなにをすることも及ばぬ中で、他地域の消防団の応援や全国からの励ましののおかげで、今こまでやってきて少しほっとしているところだ。消防団の一員として働いたことだけが、亡くなった方への、こんな時にはお話にならないほどのなぐさめと愛情であるかもしれない。なんとかして昔のように落ちついた村になおしてやりたいと思う。

## 地震の体験

第三分団 大久保 勝 治

あの地震から、早いものでもう半年がたってしまった。まさか自分の生きている間に、このような恐ろしい事がおこるとは思ってもいなかった。昭和五十四年の御嶽山噴火で、もうこの



ような事は一生起こらないであらうと思っていたのに、それからたった五年しかたっていない。あの日、家の二階にいて地震にあい、すごい揺れに今までにない地震だな位にしか思わなかった。家の中はめっちゃめちゃで、外に出ると森本さんが、頭から血を出している奥さんと一緒に降りてくるところだった。驚いて声をかけると「診療所へ」と青い顔をして、下っていった。まわりの人が「たいへんだ。坂の上から向こうの道が落ちていない」と言っている。そんなバカなと絶対に信じなかった。しかし、坂を上がってみると、なんと本当に道がなくなり、寺坂の下がなくなっていた。信じられなかった。その時の驚きはどう言ってもいいかわからない。その後、父の無事を知り安心したが、正直言って何をしていいかわからなかった。栗空のおばさんに無線で（アマチュア無線）栗空吉雄さんと連絡をとってほしいと頼まれるが、電気が止まり無線が使えない。予備電源もなく、ハンディ機は八海山においてあり、車の無線は取ってしまっただけでなく、どうしようかと思っているうちに、自分の家の辺も危ないという事で、消防の非常線が家の前からこびら坂下へ移るといので、とりあえず無線の装置一式をとにかく車へ載せておき、自分も消防に加わった（その時までは、この辺が一番の被害現場と思い込んでいた）。

それから一週間は、ただ夢中で消防活動に出て働いた。よく体が持ったものだと思う。消防に出なければという気持ちだけで、体を動かしていたような気がする。

今まで、地震や雨による土砂崩れなどの災害は、よそごとみたいに思い、この王滝村は絶対に大丈夫であると信じていた。それが、あの瞬間の地震で、このような事になって、自分の考えがまちがっていた事を思い知った。もうこのような事は二度とあってほしくない。また絶対に経験したくないものである。

（炊き出し）

普段は何不自由なく使っていた水道、ガス等が、地震で使えなくなり、しばらくは、炊き出しを受けて生活をしました。水も全国からミネラルウォーターや、緊急時のために用意された水が送られてきました。今の日本は、多少の災害等があっても大丈夫なように、災害にそなえているいろいろな事をしているようです。

私達は、送られて来た炊き出しの弁当やむすびを、各区、避難所ごとに運びましたが、区長さんなどは、配給する弁当などの数を把握するのが、一日のうちでも朝の人数と夕方的人数が違っていたりして大変だったようです。

それにしても、毎日毎日王滝へ運ばれて来ました炊き出しの

弁当ですが、これは後から聞いた話ですが、毎日むすびばかりではかわいそうだという事で、木曽福島の飲食店、旅館業者が、協力して弁当を作ってくれたそうです。中には、温かい弁当を食べさせようと、朝四時前から作って間に合わせてくれた所もあったと聞きました。そう言えば、温かい弁当を食べた覚えがあります。またあるドライブインでは、炊き出しのむすびをにぎって出すのに、手の皮がむけてしまった人がいたとも聞きました。この地震では、いろいろな人に大変お世話になりました。この事を、我々は絶対忘れてはならないと思います。

## 行方不明者の搜索

副分団長 大原 博 介

九月三十日、日曜日、三沢地区の搜索に出る。義兄を含めて、まだ三人の人間がこの泥の中に眠っている。機械はもちろん、我々の足場の何と悪いことか、もし水面を歩けるとすればこんな感じかもしれない。機械は丸太を敷き詰めて一寸刻みで進む。バックホーで穴を掘り、それを我々がのぞく、スコップで掘る、あぶくが出ると臭いをかぐ、建物の残がいはいは沢山あるけれど遺

体の手がかりはなく、腰が痛くなるだけだ。昼近くに流れの中から正沢さんの遺体が見つかる。遺体が発見されるたびに、まずは義兄であってほしいと心の中で祈りつつ、何ともやるせない気持ちで田島の遺体安置場で確認を待ってはまた現場に戻り、夕方まで搜索が続けられる。十月三日夕方遅く、御岳湖の中ほどで義兄が見つかる。泉君も早く見つかるよう祈る。十月七日、日曜日、氷ヶ瀬より上流へと向かう。他の市町村から大勢の消防団が応援に来てくれた。柳ヶ瀬地区もまるで雲の上を歩いているようだ。闇雲に鉄棒でつついてみるだけだ。十月二十八日、日曜日、今日は濁川へと向かう。途中、谷の一番深い所でかなりの余震を感じ、一瞬恐怖が身体をよぎる。濁川温泉の近辺を搜索すれど、何の手がかりもないまませめて赤んぼうのおもちゃの欠片でも……と思いながら濁川を後にする。帰りの足が重い。

## 長野県西部地震について

第二分団 川上 芳 隆

昭和五十九年九月十四日午前八時四十八分、この時私は、勤

務先がある木曽福島町の会社の事務所において、たまたま電話中であつた。揺れがおさまってから、工場内を点検し、異常のないことを確認して、それからラジオのニュースを聞いた。最初の頃は震源地がどこかハッキリせず、最初は山梨県と長野県の県境付近に思っていたが、そのうちに長野県西部御岳山付近ではないかと思ひ、事務所で話していた次第であつた。

昼のテレビニュースで王滝村の惨状を知り、帰村して消防活動に入った次第で、それから四日間は交通整理や裏山のシート張りなど雑用をやり、五日目に三沢地区の搜索活動に従事した。機械力を使ってと思つたが、ドロ沼では何ともならず、自衛隊・警察の機動隊と一緒にたつて、ドロだらけになつて搜索をしたわけだが、人間の力では限界があると思つた。

今回の搜索には近隣の消防団からも多数応援があり、ありがたいことだと思つた。また救援物資などでは大変ありがたいと思つた。

今回の経験でいろいろな教訓を得たわけだが、人間が生きていくためには水がなければどうしようもないことなど、王滝に住んでいて考えたこともなかった。それほど水というのは大切なものである。

それから災害に対する常日頃の対応策だが、各個人が認識を

もつて臨むことだと思つた。王滝村では火災につながる事故はなかったが、時刻がもう少し早ければどうなっていたかわからない。土石流に対しても、自分は川のそばに住んでいるので、いつも関心を持っている。今後またいつおこるか地震予知の科学も進歩していくであろうが、自然の様々な現象を把握して、対応するしか今のところ手がないと思う。

最後に今回の地震で死亡された方々に対して、御冥福を祈つて終りにします。

## 鼻戸へのおばあさん救出奮闘体験記

第三分団 栗 空 敏 之

私は、地震がまださめ止まない十四日の午後一時三十分頃、鼻戸で孤立してしまつたおばあさんを救出すべく、学校グラウンドより直ちに鼻戸目指して三名で向かつた。その三名というのは、役場の溝口君と小谷二三男さんと私であつた。なぜ、二名のうち「としゆき」が選ばれたかは、定かではないが、私の記憶によると、たまたま緊急で、消防団全員学校グラウンドに集合という指令が出、団長の前を二人が通りかかつたところ「お

い、その二名鼻戸まで歩いておばあさんを救い出して来てくれないか」という声がかかり、どうも若くて体力のある我々に目がとまったらしいと勝手に解釈し、直ちに「向かいます。」と返事をしてしまった。今になって思えば、誠にむちゃなことをやったもんだ、よくあんな所まで行ったもんだと笑って話せるが、その時は人一人の命がかかっているということが頭にあり、自分の命のことなど気にもとめていなかったように思う。

そうこうして、我々三名は東区の下井田さん宅から土砂が抜けた箇所を避けるようにして山道へ上がり、崩壊場所を目の当たりにしながら、上松さん宅の道まで下りて出た。まだ余震がドンドンやっている時である。ここから鼻戸までの道程は、単純に計算しただけでも往復約三十<sup>キ</sup>はある。救出に向かう我々が、逆に搜索される羽目になるのではと内心ビクビクしながら三人は黙々と鼻戸へと足を向けていた。

辺りを見渡すと、家の傾いたのやら、霊神碑が落ちて散乱したものの、またちょっと行くと道が半分陥落してしまった所が見られ、これで本当に鼻戸まで道があるのだろうかと不安になりながら向かった。松越さんの所まで来たとき、運の良いことに役場のハイゼットが停めてあり、中を覗いたところキーがつけっぱなしになっていたので、その車を拝借して行ける所まで

行こうということになった。ところどころ道が抜けているところを注意深く走行して行った。その時、よこぶきの崖のところの道路を電柱が横倒れになってふさいでいるのが目に飛び込んだ。しかし、焦らず車一台何とか通れるだけのスペースはあると判断し、電線にひっかからないように、そこを通り抜けた。そこを抜けると我家であったが、ぱっと外見を見渡したところ異常は見られないようなので、一安心、そのまま上へ向かった。

対策本部より無線が入り、東地区の状況をつぶさに説明して伝えるとの連絡あり。我々は、辺りを凝視するかのようになんて前へ進んだ。滝春夫さん宅のカーブをよこぎってまたびっくり。道をふさぐようにして土砂崩れ、これは到底行けそうもないとみたが、挑戦してみる。車は崩れ落ちた土砂や、横になった大木の横をサイドをすりながらからうじて通り抜けた。そこから一分ほどで佐藤さん宅へ辿りつく。そこには、東区五組から上の衆が全員避難していた。人員を把握しようとするが、皆気が動転していて、てんでてんでのことを言うのではっきりとした人数が掴めない。

ちょうどそこへ、中島格夫さんが「八海山から今下りてきたところだ。」と言って現れた。そこで我々は人員把握を中島さんに頼むとともに上の様子を聞いてみた。そうしたところが、中

島さんいわく、「上の方はそんなにたいした被害はない。」とのこと。これは一体どういうことかと首を傾けながら、それなら車で行けるだろうと思い、中島さんに確認したところ「いや、一箇所だけ大木が完全に道をふさいでいるところがある。そこまでは私の車が乗り付けてあるので、もしよかったら私の車で救出に行ってくればいい。」と中島さん。これなら上まで歩いて救出に向かわなくても良い。救出時、充分体力を蓄えておけると内心思いつつ、中島さんに車のキーを借りて、さらに樽沢の道を進んでいった。佐藤さんのところから約七十八分程進んで行ったところで、中島さんの言っていたとおりに進むことができなくなってしまった。そこで、役場の車を乗り捨て、そこからさきは中島さんの4WDサファリに乗り換える。さすがに4WD、ちょっとやそつとじゃびくともしないといったかんじで、三十一四十分程揺られて行くうちに管理センターへ辿り着く。

そこから第一スキー場へ向かう途中で、道が完全に土砂で遮断されてまた通り抜けられない。しかたがないのでセンターまで引き返し、いよいよ本格的に歩いて鼻戸へおばあさんの救助に向かう。そこを出た時間はよく覚えていないが、確か午後二時十分頃だと思う。ここから本部へ無線を飛ばしてみたが、返

事は返ってこない。何度も何度もやってみるがおなじこと。全く連絡がとれない。電波が弱いせいかな？無線は諦めることにして、キャンプ場を通り第一スキー場へ向かう。秋の気配を漂わせてはいるが、草は伸び放題、雨上がりであって道なき原野は歩きづらい。しかし、そんなことは言っていられないと、三人はただ黙々と現場へ直行した。ようやく第一スキー場へおり、十二権現への道路を下へ向かって歩いた。その時、またもグラグラと大地を揺るがす大きな余震、さすがに人の気配の感じられないところだけに不気味である。三人だけしかないことをより強く感じた。

約二百メートル行ったところで崩壊地に到達。見た感じ、山がそのまま川の方へずってきたのではないかと推測。鼻戸はもう目と鼻の先ののに、なんてこった。気を取り直し、今度は山の尾根づたいにカラマツ林をぬけて行くとういうことで、尾根めがけて山をかけのぼった。これがまたススキやら自分の背丈程の雑草で、かきわけかきわけ前へ進む。だが、進めどもカラマツ林にはなかなか到達できない。こんなことで、本当に鼻戸へ辿り着けるのだろうかと不安が頭の中をかすめた。二人も同様であつただろう。二十―三十分たつただろうか、ようやく尾根に辿り着き、そこからは足取りも軽く鼻戸へと向かった。途中奇

妙な現象に出会った。舗装の上に一山すっぽり乗っていて、一瞬見た時地震以前からそうであったかのように錯覚し、また崩壊した所はドロドロの粘土質なので長くつなど何の用もなさなかった。ズボット太もものあたりまで沈み、思うように歩けない。身体の大きい溝口君は余計に大変である。そのうち気にもならなくなったが……。尾根を二、三越えたであろうか、連絡が取れるかと本部へ無線を入れてみる。応答はなし。まだめである。とそのとき小谷さんが、「どうも、尾根を間違えたらしい。一つのりこえてきてしまったようだ。引き返そう。」今までの緊張感がどっと疲労に変わる。

もと来たところを戻り始めて十五分、目の前が明るくなったと思ったら両側を完全に土砂でえぐりとられ、辛うじて小屋だけ残っている鼻戸の現場へ辿り着くことができた。現場を見た時溝口君と私は一瞬目を疑った。二人は顔を見合わせ「どうしてあそこだけ残ったんだ。」と心でつぶやいた。正に離れ孤島といったかんじである。粘度質のその地盤を渡って行こうとしたとき、第一步を踏み入れた溝口君の足はいとも簡単に腰の辺まで浸かるうとしていた。さあ困った。どうやって渡って行ったらいいか。そのとき小谷さんが小屋の方に向かって「ばあちゃん、大丈夫か。」と大声で叫んだ。少したって「ここにおるよ。

わいら、えらいことになったなァー」なんともなんとも叫ぶおばあさんの声があった。元気でよかったとおばあさんを励まし、「助けに来たからもう安心だよ。」と繰り返した。しかし、それは逆に足元はぬかるんで、思うように前へ進めない。距離にすれば三十―四十メートル位なのだが、二十分程かかってようやく小屋に辿り着くことができた。その場所から両側の土砂の押し流されたのを見て、あらためて驚かされた。そこには奇跡としか言いようのない現実があった。そうこう思っている間にも余震は容赦なく襲った。午後三時三十分であった。そこには、もう一匹助けを求めて自然の脅威に怯えている犬の姿があった。

「こんな場所に長居は無用。一刻も早く脱出しよう。」とおばあさんに二三男さんが言うのと、「わしゃここを一步もうごかん。どこにいたって一緒だ。」とおばあさんが言いだして、言うことを聞かない始末である。理由を聞けば普寛様とじいちゃんが守ってくれるから大丈夫というのである。「もう寝る。」年寄りはこのいう時になると、恐怖を通り越えて開き直ってしまうらしい。私達の言う事など聞こうともしない。再三にわたり山を下りるよう説得している時に、またでかい地震がドスン。この一発が効いたのかようやくおばあさんは山を下りる気になり、行動を開始した。我々もおばあさんがくれたパンを嚙って空腹を満た



した。飲み物は外においてあったドロまみれのジュースのビン  
をとりあげ、ビンの口先を衣服で拭いて飲み乾した（人間という  
ものはおかしなもので、パンを噛りながらふと役場においてあった  
自分の弁当を思いだした）。

小屋を出たのはもう四時近かった。脱出方法は溝口君と私と  
が小屋にあった梯子を土砂の上に渡して、おばあさんを渡らせ  
ようとするものであった。しかし、その方法は思うように行か  
ず、ところどころでずんもる。そのとき小谷さんが「もと来た  
道をもどるより、この土砂の尾根を渡ってカラマツ林に入り第  
一スキー場へ出よう。」と提案。どこにどんな危険が待ち受けて  
いるのかも分からないが、一番安全な箇所を通り抜けて行こう  
ということになった。そして尾根伝いに歩いて、やつのこと  
でカラマツ林に入ることができた。そこで、少し前からとぎれ  
とぎれに無線に入っていた言葉を傍受し、大家茂門さんが管理  
センターに向かったということをキャッチしたので、茂門さん  
と無線でコンタクトしてみた。二、三回呼び出していたらやつ  
とのことで無線から茂門さんの声が入ってきた。なんと四時間  
ぶりに無線が通じたのである。ふと時計を見ると午後五時  
ちょっと過ぎていた。辺りは大分暗くなり、懐中電燈を照らす  
程のあかるさしかなかった。犬は小谷さんに引っ張られながら、

溝口君はおばあさんの荷物を肩に背負い、私は先導しながら時  
にはおばあさんをおぶったり、おろして手を引いたりして、カ  
ラマツ林の中を第一スキー場のゲレンデに向かって突き進ん  
だ。こういうとき私などは、ふだん力仕事もしていないのに、  
おばあさんを背負って十五分、ずっと背負い続ける力に我なが  
ら感心させられてしまった。火事場の馬鹿力とはよくいったも  
のだが、正にそのとおりである。

茂門さんに無線で連絡を取りながら、位置の確認をして進ん  
でいった。この時ほど、カラマツ林の中が暗く長く感じられた  
ときはなかった。二時間は優にかかったと思われる。

そしてとうとう第一スキー場のゲレンデに到達した。「タス  
カタ。」という気持が体の中を走った。茂門さんたちも管理セ  
ンターから少しくだった所で車のヘッドライトをつけて、待っ  
ていてくれた。時間は丁度午後七時であった。

こうしてやつとのおもいで、管理センターまでたどりついた  
のであった。この日の一日は、私にとってたぶん、一生のうち  
で一番長い一日になりそうである。救出したことを本部へ連絡  
すると、今日のところは下へ降りないで名古屋市民休暇村へ一  
泊するようとの指示があり、今までの疲れもわすれて、皆が避  
難している休暇村へ向かった。

## 名古屋市民休暇村での一夜

市民休暇村へ着いた私たち一行は、乗用車から荷物を降ろし、玄関から中へ入った。するとそこには、足留めをくって帰れない何人もの観光客と休暇村の従業員の人たちが、地震のニュースをテレビのボリュウムを一杯に上げ、くい入るようにして見聞きしている姿があった。

そこで、私にとっては非常に悲しいニュースが舞い込んできた。行方不明者の中に泉君と親せきの田中千里さんの名前が告げられていたのである。内心「うそであってほしい。」と何度も何度も否定し続けた。そのニュースを聞いたことによって、その夜はますます興奮して眠れなくなってしまった。休暇村の従業員の人が「夕食を食べて下さい。何も食べていないんですよ。」といって食堂の方へ案内してくれた。先ほどの鼻戸からの歩き疲れ等により、かなり腹の方もすいている。また気づかれも手伝ってか、がむしゃらにめしに向かった。いつ何時でかい（地震）のが来るかもしれない。食べる時に食べておかないと、一層食がすすむ。

用意してくれた食事を大半平らげて、やっと一息。さっきから食べることに夢中になっていて全然気がつかなかったのだが、休暇村の建物の中をよく見てビックリ。そこら辺りの壁

という壁が皆落ちていたのではないか。そして天井からは屋上の給水漏れで、給水塔破損により、流れる滝のごとく水が落ちてきている。ふっと中島格夫さんの「上の方は大したことはない。」という言葉思い出した。外見は何ともないように見えたらしいが、中身は何とも惨澹たるものである。被害はどうも場所を選ばなかったらしい。

腹も満たされ、ロビーの方へ場所を移し、ゆっくりしていたら、業者の人で福島県の桜井さんと同僚の人が、これから我々は休暇村周辺の別荘を回ってガス・電気関係をすべて点検し、異状の有無を調べてくるということで出掛けようとしていた。

しかし、二人だけではとても危険であると判断し、我々役場の人間も同行することにした。直ちに車三台に分乗、各々役割を決めて、迅速に作業が行われるよう綿密な計画を立てた。

その間に中島格夫さんが、家族のことや車のこと等を心配しながら休暇村まで歩いて上がって来たと言って、私たちの前へ姿を現わした。中島さんは八海山に奥さんと従業員の一人を残してきたままだという。そういうことが気持ちをかきたてたのである。足の痛さも忘れて無我夢中でたどりついたという。

中島さんを入れちがいに、私たちは各人に割り当てられた別荘のガス・電気の点検に向かった。地震で第二次、第三次の災

害の恐れのある現場へと足を進めた。車のバッテリーあるいは点火プラグのスパークが引火原因で、爆発するおそれが多分に考えられる。また、ふとタバコに火を付けようとして、ドカーンというケースもある。かなり慎重に作業に取りかからなければならぬ。まず我々は八海山の中島さんの黒石館へと向かった。上に残っている二人を休暇村まで連れてきて、その間にガス・電気の点検を行うという計画で、上へ向かって走っている時、回りの道路を見たが、確かに上へ行くほど被害はない。以前とまったくいいほど何もかわりはないというのが実感である。そうこうして十五分ほどで八海山へたどりつく。黒石館の中へ入ったら、残された二人がろうそくのほのかな明りの中で身仕度をしていた。桜井さんはすぐにガス等の点検を行い、私たちは回りの状況を中島さんの奥さんから聞いた。

そこで目を疑ったことは、高い所に置いてある食器、テレビ、コップ、民芸品、おみやげ物等、全然地震で被害はなかったという話である。現に、あたりを見渡してもコップのかけら一つもないではないか。まさか私たちが来るまでに片付けたなどということはあろうはずがない。本当に何ともなかったのである。テーブルに腰をおろし、ゆっくりと……。この非常時とは思われるがここでは災害は関係なしといった感じで、私たちは

奥さんのいれてくれたお茶をすすった。「下にいるよりこの方が安全だ。」まぎれもない従業員の言うとおりであった。しかし、ここに二人置いていくわけにはいかないので、取りあえず休暇村で皆と一緒に一夜を過ごしてもらうことにした。

一路休暇村へと下り、今度は岡地不動産で管理人をしている三浦さん老夫婦のところへと向かった。家のあかりはもう消され、誰もいない気配であった。玄関の戸を開けたらカギはかかっておらず、もう眠ってしまったような感じである。大きな声で三浦さんと呼ぶ。二―三回呼んだだろうか。二階でござと音がしたと思ったら、おじいさんが階段を下りてきた。「何事ですか、こんな遅くにどうしました。」逆にビックリした様子で、私たちが来たことに疑問すら感じているらしい。無理もない。村の集落が相当やられていることなど全然知るよしもないし、ここら辺はあまり被害がなかったようであるから。

下の状況を説明し、休暇村に全員上の人たちは避難していることを告げ、いっしょに休暇村へ上がるよう説得、最初はここを動かたくないと言いつ張っていたが、三浦さん老夫婦も今夜のところはということで、溝口君の運転で車一台休暇村へ向かわせ、桜井さんと同僚の人、それに茂門さん、上野君、私とで問題、異状のあるガス・電気等の身回りに向かった。ほとんど無

人化の別荘地ではガスの充満でおいが鼻をつき、ガスが納められている場所を捜すのは大変である。不安が常に頭をかすめる。誰しもがタバコの火には用心深くなっていた。どこの別荘もひっそりと静まりかえり、静けさとはうらはらに一瞬の恐怖を漂わせていた。二時間位たっただろうか。ようやくあと一件というところまでこぎつけ、私たちは点検作業を終え休暇村へと帰路を急いだ。

休暇村へ到着したのは午後十一時近かった。ロビーへ入ったときはもう大部分まんじりともしない一夜の中で床についていた。我々も二人ずつ交替で仮眠をとることにし、たくさん用意された毛布を三、四枚かさね体を横たえた。二時間はどうとうとしただろうか、物音に気づいて目をあけると、二、三人眠れないのかアルコールを口に出している。時たま揺する余震は一気に眠気をさましてくれる。とてもじゃないが眠れやしない。

「これから一体、どうなるんだ。」心の中でつぶやきながら、学校グラウンドへ避難した人たちのことを思う。役場の裏山が崩れてきほしないだろうか。あるいは土石流が牧尾の周辺一体を襲ってはいないだろうか、と次々に頭の中を不安がよぎった。そんなことを考えてうとうとしているうちに、ふと気がついてあたを見渡すともう外はすっかり明るくなっていた。結局、眠っ

ていないのと何ら変わりはない。他の皆も、何だかんだでほとんどもう目をさまし、不安をかくしきれない様子で外を見ていた。

雲はどんよりとしていて、深い深いきりの中につつまれている。午前五時近かっただろうか。学校グラウンドへ避難した村民のことが心配になり、本部へ無線を飛ばしてみる。何の応答も返ってこない。まだ眠っているのだろうか。二十分おきくらいに無線を入れてみるが、通じる気配がまったくない。そうこうしているうちに午前六時近くなったら、急に本部から無線が入ってきた。どうも朝のやや等で無線の電波が通用しなかったようである。これでまずは一安心。休暇村の従業員の人が用意してくれた朝食をそそくさと済ませ、本部からの指令を待った。無線が入り、自衛隊のヘリコプターにて救助に向かうとの連絡がある。ヘリは一度も乗ったことがなかった。ヘリに乗れる期待と一体これからどうなるやらといった不安が入りまじり、複雑な心境になる。皆をヘリポート近くの運動場へ移動させ、待機。そんな中で黒石館の中島さんたちと岡地不動産の管理人の三浦さんたちはそこへ残るということで、しばしの別れを惜しむ。とその時である。いきなり大地がグラグラッとマグニチュード六・四、二回目の大きな余震に出くわす。休暇村の建

物が、まさに崩れ落ちてくるのではと思わせるほどの、ものすごい揺れであった。今度こそ死ぬのではと、生命のよろさを直感的に感じながら、ただ自然のなすがままに体をゆだねた。

それから二、三十分でヘリが救出にかけつけた。八人ずつということで、まずは観光客の人たちから、次から次へとピストン輸送を開始した。私たちがヘリに乗ったのは一番最後の便で、昨日救助した小谷さんと犬もいっしょであった。ヘリは一直線に学校グラウンドへと向かった。今が一番安全な大地の揺れない大空なのである。山が小さく見える。崩壊箇所もはっきりと見える。流れるような景色の中に学校グラウンドが……。到達したのだ。命があったことに、運命の糸の強さを感じ、悪運に感謝する。

## 救援物資

本部 小谷 宗 司

四年前には有史以来といわれた御嶽山の噴火があり、いわゆる天災時の消防活動の経験はある。しかし、今回の地震による活動はその比ではなかった。

幾度となく語られたように、王滝村は火山岩質による堅牢な地の上に位置し、天災なるものには無縁であるとの認識のもと、災害に対しては全くの無防備であった印象を得る。そのような我々に長野県西部地震は大きすぎた。適切な消防活動を行うには、実質の八十名余りの出動団員の活動は、あまりにも微力である。強力な指導を得ず、団員各々がしつかりした目的を捉え切れないまま、ただ暗中模索の中、動き回っていた。それは身体に強烈な疲労を得る事で眼前の不安を忘れようとしているかにも見えた。一体どれだけ多くの不安が頭の中を廻っていた事か？ 行方不明者は？ 二次災害の恐れは？ 道路は？ 復興できるのか？ 家の被害は？ 今後この村で生活していかれるのか？ 等々何もかも未解決のまま、ただ目的なく動き廻っていた。

そんな中で我々の気持を勇気づけてくれるものが幾つかあった。激甚災害の指定に伴う国および県の援助、金融機関の幾多の優遇措置その他。そして直接的には、地震の当日から救援活動に入った多数の自衛隊員、県警の活動。動転の我々を尻目に行方不明の捜索という一つの目標に向かって、規則正しく活動している姿は我々に一条の光を与えてくれた。さらに生活面においては近隣の町村を始めとして全国各地からの救援活動が

あった。地震の翌日から弁当、おにぎり等の食事類、牛乳、ジュース等の飲み物類。日がたつに連れ、民間会社、農協、商店等を中心として、飲み物、野菜類、果物類、インスタント食品、調味料、衣類、毛布等がトラックでソクソクと運び込まれて来た。それも人口千三百人余りの王滝村にとっては桁違いの量なのに驚かされた。また、その種類も列記するにはキリがなく、大型電機製品を除けば恐らく一般スーパーで販売されているほとんど全種類に相当する品目であっただろう。

大自然の前には人間の力なんていうものは、いかに微力たるものか痛感した。遅々として進まぬ行方不明者の搜索。濁川地区などはその糸口さえ見つけれぬまま日が過ぎてゆく。搜索活動を終え、全身泥まみれの団員が本部に集合する。疲労と無力感に重くのしかかれた毎日であった。救援物資で食事を取り、送られた毛布にくるまり睡眠をとる。翌日はまた救援物資のカップ、軍手等を身にまとい、食事、飲み物を、やはり救援物資のザックに入れ、搜索活動に出かけた。地震で混乱し整理できないままの自宅には、間に合うものは何もないに等しい。二次災害を恐れて家族を他地に避難させ、食事を作ってくれる者も居ない我々には、その生活のすべてが救援物資によりまかなわれていた。

約一か月半以上も続いた物資の受け入れは役場住民課職員が担当し、搬入整理は本部待機中の消防団員、分配には各地区長、隣組長、または営林署職員が担当してきた。何もかも初めての体験の中、全国各地からの温かい励ましは、我々に現実的な復旧への勇気を与えてくれるとともに、今まで以上の王滝村を建設していかなくてはならない責任を強く感じた。あらためて感謝申し上げたい気持である。

## 行方不明者の搜索

第二分団 下村 宏 之

昭和五十九年九月十四日午前八時四十八分、王滝村を震源地とする大地震が発生し、土石流、地滑りに見舞われ、一瞬にして二十九名という尊い命が失われた。

翌日の早朝から、自衛隊、県警、消防団の行方不明者の搜索が本格的に始まったが、断続的な余震、雨、泥水と闘いながらの搜索は難航、重機などの大型機械も導入し、休日には県内外の消防団、郡下町村の消防団の応援をえての大搜索が展開され、大又川の大崩落現場での最後の行方不明者を発見したのは、実

に震災から二十五日目でした。また、手つかずだった氷ヶ瀬周辺も九月二十日から搜索。でも一面泥の海、厚いところでは三十層の土砂に埋まり、手のつけようのない荒れ方だった。道路は寸断、機械も入らずに人力による搜索で一か月以上経ても一人も見つからず、行方不明者の搜索は本震一か月を区切りに大幅に縮小、地元木曾署員、村消防団員と不明者の家族だけとなりますます難航となった。約二か月ついに十五人の行方不明者の搜索は、大量の土砂の中から発見するのは困難と、一応の区切りをつける方針を村が示し、搜索を断念するに至った。長期の搜索で各団員が団結、その責務に精励されました。また、県外、郡内の消防団員のご協力に感謝するとともに、犠牲になられた二十九名の方々の御冥福を祈ります。

## 給水、給食

第二分団 下原 敏 秋

地震発生と同時に、大又水系の導水管が松越地区の崩壊とともに二百層にわたって流失し、溝口水系の水道管もいたる所で切断され、村内全域五百五十三戸が断水した。当初は、四か所

の避難所へ給水の輸送を行ったが、九月十六日に避難命令が一部解除されたので、避難所をはじめ各地区の給水場まで輸送範囲を広げた。輸送に当っては、毎朝開かれる分団長以上会議で班編成、団員二、三名が一組となって輸送した。日程は、朝八時から溝口地区でろ過、滅菌された飲料水を、四か所の避難所、野口、小川、上条、下条、東、中越地区の順に輸送した。全地区への輸送終了は午後四時頃であった。また九月十八日には、日本消防協会より浄水機が寄贈され、飲料水の確保が増大された。飲料水の輸送は、九月二十六日の仮復旧ができるまで続いた。

給食（たき出し）については、九月十四日午後三時ごろには、早くも近隣町村からたき出しが届けられた。消防団現地本部のある小学校講堂に集められ、避難所地区別に、数量合せを行い、それぞれ配送した。給食の配送は九月三十日まで行われた。

五十九年九月十四日

第三分団 瀬戸 梅 雄

天のゆれ、地のゆれ、一瞬にして山々はくずれ、谷をうめつ



くす。人はだれもが突然の出来事におどろきうろたえている。自然災害の恐ろしさは実際に自分の目で見、体で体験してみなければわからないというが、現実のものとすると人の力ではどうにもならない。ただ逃げるのみである。

災害発生後、対策本部設置、やらなければならない事がたくさんある。地元でうごける団体は消防団しかない。自分達は被災者である前に消防のつとめをやらなくてはならない。食事、物資の配分、とり残された人の救出、警戒などいろいろなやらなければならないが、特に重要な仕事は行方不明者の捜索である。土砂くずれの発生、逃げる間もなくその中にもこまれた人々、顔見知りの人、またその家族の気持を思うと早く見つけてあげたい。だけど現場へ行ってみると、地形が変わってしまった程のぼう大な土砂の量、自衛隊、警察の人達の応援もあるけれど、人の力にはやはり限度がある。大型機械を入れてもなかなか見つからないあせり、体の疲れ。地震の後そのままにしてある家の後片づけをして生活してゆくようにしなければならぬ。

一か月近く過ぎて、下流の現場は全員発見、上流地区においては想像以上の土砂にはばまれて何の手がかりすら得られない。そして捜索打ち切り、一生懸命さがしたけれど見つからなかった人達、土砂の中では冷たかろうが心安らかに眠っておく

れ。あの地震で運命が一瞬のうちに変わってしまった。運よく助かった人達は、王滝を今まで以上にするため、亡くなった人の分までがんばらなくてはならない。

## 長野県西部地震

第三分団 滝 和人

まず、この長野県西部地震により亡くなられた方々には心より御冥福をお祈り申し上げたいと思います。さて九月十四日午前八時四十八分マグニチュード六・八の直下型地震は突然王滝村を襲いました。その時私は父と宮島君とともに三人で八海山で行われる地鎮祭の準備をしていました。急にゴォーという音が聞こえてきたとおもったら、まるで地の底から空中にほうり投げられるような激しい揺れがおこり、わずかに数十秒間であったと思われるが、その揺れの最中には身動きがとれず、いかなる行動もとれなかった。しばらくして揺れがおさまってから火の点検や家の中を見て廻ったが、それはひどい状況でロッカーや棚は倒れ、足の踏み場もないほどであった。それからまず情報だと思いラジオをいれると、地震であった模様だが甲府で震

度三とかはつきりした事はわからなかった。近所の人達と家の下の駐車場に避難していると、だんだん王滝村が震源でかなりの行方不明者が出ているという情報が入り、学校に避難し、消防団員も集まれという伝達が出て、それから消防団としての活動が始まった。

それからは毎日避難した村民の世話、行方不明者の捜索、救援物資の搬入や配給、村内各所の見廻り等、王滝村消防団として、また個人としても経験した事がなかったものであった。けれども毎日が非常に早く過ぎ、とくに最初の一週間くらいは無我夢中で、疲労もあったが緊張感でいっぱいであった。

そして地震より六か月すぎた現在、いろいろ考えてみると、まず第一に消防団としてみた場合、地震後の火災で焼けた住宅がなかった事がいちばん幸いであった。これは時間帯が朝食もすみ、火を使っていた家が少なかったし、使っていても地震の後すぐに火のしまつをするという意識が村民ひとりひとりにあったからだと思う。

また、避難体制については、村民の意識の中に多少なりとも、王滝村は地盤が固いから地震にはだいじょうぶという思いがあり、有線放送が使えず、情報が伝わらなかった事でいっそう混乱したと思われる。デマや放送のしかたなどいろいろな問題も

あった。

このように王滝村民にとって、この地震災害は予期せぬ自然の恐ろしさをまざまざと見せつけました。日本は地震国です。この教訓を生かし、情報網の整備や観測点を増やし、観測体制の強化をして、地震予知に一步でも進んで、地震災害を未然に防いでもらいたいと願うものです。

## 地震による消防出動の雑感

第三分団 滝 一 利

災害などというものは、テレビの向こう側の世界のこと、自分とは、この王滝村とは無縁なものと思っていたので、今回の突然の地震には最初夢を見ているようで実感が湧かなかった。消防出動も地震のあった時からだったが、もう頭が混乱するというより、空になったような状態で、何が何なのか分らなかった。

この地震で実際に出動してみても、当り前なことだが、今まで消防団というものは火に関する事が仕事だと思っていたが、そうではなく、それは狭義なこと、いっどこで何が起こって

もその地域を守る要が消防団だな、ということを経験的に感じた。今まで訓練の時ボンヤリしていたので、機械の操作もあまり出来ず、下手をすると消防車の運転も思うようにならない自分にならず、下手をするとなつた。何度も繰り返す訓練、内心阿呆らしいと思ひながら、無駄に時を過ごして来た結果だと思ふ。災害というものは、またどんな時に起こるかもしれないし、村を守る要は消防団であり、その消防団員の一人であるという自覚をしっかりと持って、そのために今後の訓練で基本技術だけはしっかり身に付けておかねばならないと思う。

あの崩落現場で、泥だらけになつて搜索したこと、あの三食とも握り飯を食べたこと、何も役には立たなかつたけれど、泥だらけで搜索から夕方帰つて来た時、道で会つた人の「御苦労様」という言葉などが、特に印象に残っている。

同じ握り飯を食べて、同じに泥だらけになつてみると、近頃忘れかけていた仲間意識も戻ってきたような気がする。それは連帯意識であり、消防団の一番必要な団結というものにつながるような気がする。

今度の地震は大変な災難で不幸なことではあつたが、災難は災難として、今後の教訓として生かして行かなければならない気がする。

## 長野県西部地震の雑感

本部 滝 春 夫

あのいまわしい長野県西部地震の当日、私自身は修学旅行誘致の宣伝で出張のため九州福岡市にいた。翌日(九月十五日)からの東区あつまら会の旅行の費用の手配を役場の松越君に依頼してあつたため、福岡より十四日の午前中何度も電話したが、話し中のため通じなかつた。(すでにこの時村の中は混乱中であつたが、遠距離の地では知る由もない)その後も自宅、胡桃沢寛司さん宅、役場等へ電話するが通じなかつた。

十四日夕方五時名古屋駅発の電車にのるつもりで山陽新幹線車中にいたが、京都駅を過ぎた頃より車内アナウンスにより中央西線が不通である事を知つたが、真相はまだわからなかつた。名古屋駅で降り、駅員に聞いてみたがさっぱり要領を得ず、十四日は終日電車は動かない事を確認し、宿をさがすためコンコースを歩き、駅前広場の手前の鉄道案内所へ寄つたところ、五時発のしなの号のみ運転する事をきき、急いでホームへかけあがつた。電車を待つ間、役場へ二度ほど電話を入れたが通じ

ず、電話局のアナウンスが木曾地方は電話がつながりにくくなっている事を知らせたのみであった。その後、地震のため電車が不通である事がわかったが、場所等はわからず、電車をひたすら待ちつづけた。

発車十分前位だったと思うが、ホームの最前列の私のとなりへ六十歳位の紳士が新聞を読みながら並んだ。チラッとその新聞を見て驚いたのなんの、ひたたくるように王滝村という大見出しの入った新聞を借りて読んで行くにつれ身体がふるえ出した。何という事が起ったんだらう。写真には松越地区といわれた大崩落のなまなましい姿が写っていた。あわててその新聞を返し自ら購入した新聞を読み返し読み返しながら、車中では家族の事、親類の事、知人の事、村内の様子が勝手に頭の中を悪い予想ばかり飛びかった。木曾福島へ降り、車で王滝へ向かったが、道中ではすでに自衛隊や警察の車輛がやたら目につき、ただならぬ雰囲気を感じながら公民館前へ行き、知り合いからかいつまんで村の状態を聞いた後、背広姿のまま役場へ急ぎ、上司に帰庁の報告をし、親戚で消防の作業服を調達して役場勤務についた次第である。

その後は皆が知る通り、まるで戦場のような状態が続いたのであるが、私自身は消防の任に着く事があまりなく、約一か月

程は報道担当で報道記者相手が仕事であった。とにかく、今度の場合は噴火の時の比ではなく、消防団員、役場職員、とりわけ村民は何にすがるか助けを求めたくも、相手が地震では予想もつかず、心労、肉体的疲労は限界に近かったのではないだろうか。

二度と起きてほしくないのは誰もが思う事であろうが、起きない補償がない以上、もし起きたらどうするかをいつも考えて生活したいと思っている。

## S 59・9・14 混乱の中で

第一分団 田 中 秀 夫

最初の衝撃におそわれたのは、あの日、事務室で同僚との朝のお定まりの世間話や、自分の今日一日のスケジュールの確認を終え、気分を入れ換えて机に向かったときだった。ガタガタと揺れを感じたと思う間もなく、役場の建物全体が巨大な手の上でお手玉のように何回もつき上げられた感じだった。机の下に潜ることも忘れて、ただ「オーッ」というかんじで、夢中でその辺の物にしがみついていただけであった。最初の揺れが一

応収まったとき、事務室はほこりが霧のようにたち込めて、まさにガレキの山と化していた。百ギを超すような書類ロッカーが踊り、軒並倒れ込んでくる状況で、庁内で一人も怪我人が出なかったことは、今考えてみても全く信じ難い事実だったと思う。「やはり東海沖地震だろうか、それにしても国の予知組織はいったい何をしていたんだろう」とか「この状況だと、おそらく二、三件の火事がでるぞ。だけど、統一した指揮のもとでの組織だった消火活動は無理だな。各自が近くの現場に勝手に出動することになるのかな」などとその時漠然と考えたことを憶えている。ひっきりなしに起こる余震で、屋根瓦が玄関先へバラバラ落ちてくるのを避けながら、道路へ出た。とりあえず自分の担当である第一分団の消防車を出動に備えて庁舎前まで持ってきておきたいと考えて、近くにいた分団長の承諾を求め、サンダル履きのままで、瓦や飛び出した石垣の石が散乱する道を車庫めざして走った。愛犬のトビーが白いまりのようになっ

て一直線に自分に向かってくるのが見えたのは、火の出ている我家をみてはっとした時だった。

いっばいに見開かれたその眼は、恐怖感に完全に占領されているのが明らかで哀れであったが、自分にも余裕がなく、頭を二、三度軽くたたいてやっただけで、そのまま土足で家へ駆け

込み、防災服とヘルメットをとって走った。家には母だけしかおらず、二言三言言葉を交したただけであったが、なんとなく、妻も父も無事でいるだろうと、それ程安否については気にならなかった。というのは目に触れたうちでは、つぶれたり、非常に危険な状態になっている家がなかったからである。

消防車を出して「さて、役場へ行くのに車のサイレンを鳴らしたのか」と一瞬迷ったなどという全くどうでもよいことを今でもはっきり記憶しており、人間とはつくづく妙なものだと思う。小雨に濡れた道路に飛び出してはみたが、呆然自失として立ちつくす近所の人々を消防車の中から見ながら、まるでサイレント映画をみているような現実離れた印象を受けたことを思い出す。

役場へ戻り、今のところ火災が発生していないこと、滝消防団長が役場へ駆けつける時、目撃した松越地区の地滑りの状況などを聞く頃になって、やっと時間の回転の感覚が正常になり出したように思われる。

いや、それからは逆に、時が恐ろしい勢いで音をたてて流れ始めたと言った方が良いかもしれない。まだその時間帯では、役場も消防団も組織としての機能ははたせず、ただ各自の判断で動いていたように思われる。

自分としては、まず三浦ダムの情報収集が先だ、それから松越地区への自衛隊要請だ、それから火災防禦だ、それから災対本部の組織固めだと矢継ぎ早に思いうかんだが、頭だけが過剰反応を起こしてオーバーヒート気味となり、実際にとった行動は冷静さを欠いた実にチグハグなものだったと、今、反省している。電々公社の孤立防止無線や県防災無線でやっと外部と連絡がつき、最初に出た人の馬鹿にのんびりした応対に一人であせり、かみつきながら「甲府が震源地などと皆話しているが、これはひょっとすると、俺が思い込んでいるような広域的な大地震でなくて、この周辺だけのごく局地的なやつかもしれないぞ」と疑い始めてから、今まで無線を通じて一応外部支援を請うにしても「こんな大災害だから応急活動も、できてもできなくても村独自の力でやるしかない」と考えていたものが、今度は100%外部依存の全くの被害者の態度に自分が急速に変っていくのをおさえることができなかった。

情報がとれるまでに時間がかかり、非常にイライラしたが、三浦ダムが大丈夫ということで、当面、滝越、野口方面の緊急避難は必要なく、住宅火災もないことで一息つけた気がした。

正午近くになり、災対本部はできたことになったが、夕刻頃までは、命令系統も定かでなく混乱の極にあったが、団員の自

発参集による消防団活動の方が、早く組織的に展開されたような印象を持っている。

少し落ち着きが戻った段階で、村民に状況説明や緊急連絡とということになって、有線放送室へ走って行って、非常電源のバッテリーのほとんどが、収納ボックスから飛び出して床に散乱しているのがガレキの下に見えた時は、本当にがく然とした。

要請に対して松本の第十三普通科連隊が発したことで、日赤の毛布や木曾福島町等から救援食糧が届くことで非常に勇気づけられたことは強く印象に残っている。

また滝越地区とも、感度が悪い無線交信ながら連絡がとれ、おばあさんが一人ガケ崩れの犠牲となったことを除けば、区と営林署の事業所などが協力して自主避難をおえており、人数の掌握などもきわめてしっかりしていることが解ったこともうれしかった。滝越地区は必要に迫られて自衛消防団を組織しているが、日頃の自主的な防災活動と自分達がやらなければという意識の高さが、この点で他の地区との決定的な違いとなって現われた気がする。

夕方近くから避難指示の内容や避難所の割り当て、給水や救援食糧、医療のことなど、行方不明者の救助活動を除いて第一義的なことが災対本部において徐々にではあるが、系統だてて

機能するようになったが、その夜遅く開かれた対策打ち合わせ会議では、伝上川の大土石流のことは一般にはうわさ程度にしか知られていず、近くの松越崩壊区の人的被害の詳細についてすら確定することができなかったというのが私の知る限りにおいての事実である。

ごった返す、ある意味では無法集団のような報道関係者とのイライラするやりとりや、パンク状態の電話、きれ間なしに無線機からとび込んでくる錯そうする情報、自信のない、誰が出したとも解らない災対本部の指示、堂々めぐりの会議。

明け方近く「いったい何が起こってしまったんだろう」とぼんやりおもいながら、事務イスを並べてガラシとした二階の部屋のすみで、一人横になってみたが、体中がカッと発熱したかんじで、眼をとじることでもできなかった。「夜が明けて自衛隊のヘリが飛んだら、これからが本当のたたかいだ」とわざわざ声に出して自分に号令をかけてみた。

## 王滝村を襲った地震

本部長 中越 学

夢にも思っていなかった、昭和五十四年の、静かな紅葉に映える秋でした。霊峰の御岳山の噴火が起り、住民をおどろきと不安におとし入れ、五年の歳月が過ぎ去り、おだやかな村にもどったかと思いました。五十九年九月十四日、小雨降る朝でした。前触れもなく突然に襲った大地震が王滝を揺さぶり、痛ましい土石流は数多くの犠牲者と、美しく映える景勝の山川を一瞬にしてのみ込んでしまいました。私は、十四日の朝、福島町の寮の三階で仕事中でした。福島町では、八時三十分から、数回体を感じる地震があり、八時四十九分ゴウーという音とともに建物国道沿いにかたむいて、障子はずれ、窓のサッシが開き、まず柱にしがみついて地震のおさまるのを待った。一階に降りて家の人達に聞けば震源地は甲府との話であったため、お茶を飲みながら、いろいろと想像話に夢中であった。お茶を飲み終り、また仕事にかかり、十二時の食事に一階に降りて見れば、震源地は王滝との事であった。一瞬に体がふるえるまま



にテレビのニュースで、あの痛ましい松越地区が映った。私は、すぐに荷物をまとめるとともに、家族の事、火災の事、そして自分が消防の任務であるため一路王滝へ向かう。

二子持より通行止めであった。車を乗り捨て、ある人の單車に乗って家へ帰る事ができた。家へ帰れば、足の踏み場がない程に被害は多く、隣り近所の人は、皆学校へ避難したとの事で一安心できた。学校では、避難した人達が不安とおどろきでまどっている。その後、講堂と保育園が避難場所となり一夜を送る。翌日から消防団は、物資の配送で多忙の毎が続いた。この災害で水道が断水となり、一番せつなかつたと思います。また他町村の消防団はじめ、全国各地より心温まる御心援を頂き厚く御礼申し上げます。

## 救援物資

第二分団 中 島 敏 行

地震発生後から県内外の各自治体、団体等から食糧品を中心とした救援物資が王滝小学校に続々と搬入された。村消防団の本部が小学校内に設置された関係上、当初は消防団員が炊き出

しの配付時に食糧品を配布した。わずか数日の内に、小学校昇降口等に置かれた物資も玄関先にまで積まれるようになった。また、九月十六日から国鉄をはじめ、郵便局、民間の運送会社が無料の取扱いを行ったため、全国から大量の衣類を中心とした救援物資が国民体育館、森林組合の車庫等に搬入された。十一月五日までに送られてきた物資の数はダンボール箱に換算しておよそ十万个にも達し、最終的には各戸に約百個〜三百個の物資が配付された。

## 危険箇所の見廻り

第一分団 中 洞 今朝男

九月十四日、地震発生から三日ほどすぎて、人家および公共施設に危険のおそれがある山林等の調査を行い、危険箇所にシートの設置をし、緊急箇所については、林務課で設置した伸縮計の見廻りを行った。見廻り箇所は、国民宿舎下、国民体育館上、役場上二か所、森本民宿上を一日二回、雨天の時は回数を増して見廻りを行った。なお、村有林が広いため、住民に有線で「危険な箇所があったら連絡してくれるよう」依頼した。

林道、治山の災害箇所の調査および警戒とパトロールを行った。

## 感想文

第一分団 西村 祥夫

誰もが考えたことさえなかった大地震によって、昭和五十九年九月十四日は王滝村民にとって、生涯忘れることのできない日となりました。わずか数十秒の激しい揺れが、夏山シーズンも終わり静けさを取り戻しつつあった王滝村を、悲嘆と狂躁の渦の中にまぎこんでしまいました。

多くのかげがえのない生命が奪われ、家や土地が失われ、御岳山の大崩落によって村の地形がまったく変えられてしまいました。まさか自分がこのような現実に見面することになろうとは、考えてもみなかったのです。当初は、王滝村が震源地だということだけがわからず、消防団が出勤する事態になっていることも知らずに、家族の安全を確認して、家の中のかたづけをしていたのですが、消防団員として出勤した時から最後の搜索が行われた十月末までの間は、まるで時が止まってしまったかのようになっしまいました。

連日の何箇所にもわたる搜索活動に始まり、救援食糧の配付、物資の整理、そして危険箇所の監視等、かつて経験したことのない災害救助活動のなかで、いろいろなことを経験し、学ぶことができたと思います。また、消防団員相互の結束も一段と強くなったように感じました。

多大な犠牲を強いられた今回の災害でしたが、逆にまた貴重な教訓を様々な形で残した災害でもあったと思います。まず、痛感させられたことは、確かな情報をいかに早く、どのような形で住民に伝えなければならぬかということでした。様々な憶測や誤報が乱れとんで、しばしば住民を混乱させていましたし、一時はパニックになったこともありましたが、これらのことも確かな情報さえ流れていたら、防ぐことができたのではないかと思います。有線放送も各所で寸断され、まったく無力化してしまいました。

最も大切なことは、正確な情報の収集と確認、そして伝達という一つの確固とした流れを作ることです。いろいろな情報や状況報告を一箇所に集中させ、検討し、判断するというような体制がとれていなければ、いたずらに混乱を招くだけです。無線による連絡もできるだけ一箇所で集中してコントロールすることが必要だとも思います。今回の災害においては、幸いに

も誤報などによって二次災害にあうというようなことがなかったのですが、一歩間違うと取りかえしのつかないことになってしまいます。

現在、復旧工事も急ピッチで進められておりますが、王滝村がこの痛手からたちなおし、元の静けさを取り戻すのには、まだ長い年月が必要だと思います。なんとかこの苦境を乗り越えて、村を復興させなければなりません。そうすることがまた、亡くなってしまわれた人達にとっての供養になるのだと信じます。

決して多いとは言えない消防団員のなかから、貴重な若手の三名を奪ってしまった今回の災害は、我々団員にとってたまらなく悲しい出来事でした。しかし、この不幸な災害にあたって、団員全員が一致団結して救助活動にあたることができたということは、大きな収穫ではなかったかと思っています。今回の災害で得た様々な教訓を、今後に生かして具現化して行くことが、我々に残された最大の任務だと思っています。

## 行方不明者の捜索にあたって

第一分団 林 雅 春

あの一瞬より幾時間がたったのか、今でも続く余震の激しさ。情報が入るにつれ判る災害の余りの大きさ、何で静かな村を襲ったのか、今でも夢であってほしいと思うものの、現実はいのちの発着、救援活動を目にし我にかえる。夕方、自衛隊員の捜索の帰りの全身を泥にした姿を見、大変な事と思われる。そして消防団員が捜索に入る日がきた。災害現場を目の当たりに、恐怖の一瞬が思い出され、この土砂の下にいてと思われる行方不明者および遺族の方々の心境を思うと、我々団員が一刻も早く助け出さなければと思う。現場に入り遺品、また手がかりになる物品を求めて、掘りおこすスコップにも力が入るが、ぬかるんだ泥に足を取られ思うようにはかどらない。災害前の状態を覚えている我々でも、見間違えう程の変りようで、どれだけの大きさの災害であったか計り知れない。「何かが埋まっている」との声に、そちらにかけつけ交替に掘り進んだが発見に至らない。気はあせるだけで何も進まない。捜索にあたっては大勢の皆さま

んがたずさわり進められ、消防団員としても危険を感じつつも、できるかぎりの事はやったつもりであった。結果として行方不明者全員の発見ができなかったのも、災害の大きさが桁はずれの規模であり、残念ではあったが、消防団としては精一杯の捜索活動であったと思う。

## 情報伝達

本部 藤 沢 和 彦

災害発生当初、僕は村の対策本部で消防無線係として従事した。多くは各現場の情報収集、各部所への伝達、警察、自衛隊との相互連絡という役目である。

非常時における情報の混乱は当然のことと思われる。今回もさまざまな情報が飛びかい、その処理に苦慮したものである。中には誤った情報も多く、頭の回転がきわめて悪い僕は、あわてふためくだけでその責務の半分も果せなかったと痛感している。

実際にあった話で、一般住民からの情報を、消防団員が聞いて本部へ連絡してきた。内容は「裏山がくずれそうだ」と言う。

もう一度聞き直すと、「音をたてて崩れている」と言うのであわてたのはこっちで、すぐ関係の人に調査しに行ってもらった。

その間にも「付近の住民は避難させる」という無線も入ってきた。しかし、調査した結果、山に異状はなく、音をたてて崩れているような状況はまったくないということになった。それを聞いてホッとしていると、帰って来た調査班に「いいかげんな情報は受けるな!」と怒られてしまって、現場にいないという自分の立場にいらだたしさを感じたものだった。幸い避難する住民に事故はなかったものの、後から「あれはまちがいでした」ですまして良いものだろうか? もっと慎重な対処が必要だったのである。とにかく一般住民も消防団員も不安な心理状態にあるとき、ひとつの食い違った情報で大きな混乱もおきかねないということを認識しておかなければならない。しかし、今からよく考えてみると、対策本部も消防団も、本格的な体制がとれていない時点で、的確な情報の収集、伝達などと考えている余裕などまったくなかった。なにしろ自らが、地震の恐怖と不安の中に陥っているのである。山が崩れそうだと聞けば、あの混乱と騒ぎの中で、そう思っても仕方ない状況であったことは、誰もが知っているはずだろう。そうした多くの体験の中から、ひとつずつ得られるものをつかみとってゆくしかないのではな

いだろうか。情報の収集、伝達、無線使用の通話方法等の訓練も、もっと必要であることを今回の災害で知らされた。

この災害で得た教訓を、今後の消防活動に生かしていくことが、大災害を経験した我々消防団員の今後の課題であると思う。

## 王滝地震

副団長 松 井 征 男

昭和五十九年九月十四日午前八時四十八分、王滝村がマグニチュード六・八という強い地震に襲われて各所で土石流、地滑りが発生、地震の瞬間、家の中からどうして外へ出たのか全くおぼえがない。気がついたらちょうど船に乗ったようで何をするにも体が動かずその場に座ったまま、揺れが弱くなり一度家の中へ入って見ると中はガラスの破片、棚の本、着物が散乱して、足の踏み場もない程で安全ぐつのまま部屋へ入る。やっと消防の服が見つかり、着替えて学校へ一目散。二人の子供の事が心配。絶え間なく余震が続き、避難をして来た人達が恐怖で青ざめた顔をして、ただ右往左往するだけ。

大又川ぞいで地滑りが発生し森林組合の建物、御岳生コンが

流され、森林組合の従業員、生コンの従業員が行方不明、名古屋交通局の人が行方不明、濁川温泉流失。日数がたつにつれ被害は増える一方で、いったいこれから王滝村はどうなるのか予想もつかない。月日が過ぎるのは早いもので、あれから半年余りが過ぎた今日であるが、復旧工事も急ピッチで進み、段々と地震前の村にもどつつあるが、またこのような大きな災害が発生すれば今度は完全に王滝村は……。これから先の事を心配しながらの今の生活状況である。しかしいつまでもおびえているわけにいかず、あつという間に過ぎた半年であった。

## 県西部地震

第二分団 三 浦 稔

地震の当日、私は仕事で王滝にいませんでした。飯田に着いて昼御飯を食べていたら、ニュースで王滝村がマグニチュード六・八の地震で被害が出ていると聞いて、あわてて帰ってきたのは夕方でした。家に着くとすべての家財道具が倒れていてびっくりしました。妻に「消防団員は出勤している」と聞いて、学校へ行つて見ると、ヘリコプターや報道陣がおり、また部落

の人達が体育館に避難していました。私達消防団は水道が出ないために各部落へ飲み水を配りました。私は飲み水がないと、こんなにも不便なものかと改めて思いました。夕飯は炊き出しでした。家には帰らず学校に泊まり、夜は余震が続き眠れませんでした。次の日消防団は朝七時に起き、仕事の内容の打ち合わせをしました。私達第二分団は道路の巡回や全国からの救援物資を体育館に入れたり飲料水を配ったりしました。四、五日過ぎてからは、三沢地区の行方不明者の搜索でした。この中には泉君もいると聞きびっくりしました。現場へ行ってみると地質がべたべたで、長靴をはいても潜るくらいで足が疲れました。一週間したら、私も疲れのため体の調子がよくありませんでした。三沢地区の搜索も二、三日で打ち切りという時、最後の遺体が見つかり、その時にはほっとして体の力が抜けるような感じでした。次の日からは柳ヶ瀬地区での遺体の搜索が始まり、行ってみると三十センチくらいの土砂で埋まっていました。私は三沢地区より搜索が大変だと思いました。それから幾日かして中信地区の消防団が千人くらい来て搜索を一緒にやり、地震の話をしたら驚いていました。消防の搜索も最後の日には柳ヶ瀬地区と三沢地区で消防団が全員で黙禱をしました。このような地震は二度とこないように祈りたいと思います。

## 行方不明者の搜索

第二分団 森

護

最初地震が起きた時、まさか行方不明者の搜索をするとは思わなかったし、こんな場所ですとは思わなかった。それは、行方不明者の搜索は、大量の水分を含んだ泥のため、一歩進んだら反対の足が抜けなくなったり、水たまりのような所は、足が膝の所まで入ってしまい、思うように搜索できなかった。やはり何でも機械化してしまった今では、人間の力では、とても行方不明者を捜し出すことは困難ではないかとさえ感じはじめた。幸いに、自衛隊、警察などの協力を得て、全員は無理だったけれど、半分以上の人を捜し出すことができた。いつも車で通っていたこの場所が、平和な村が一瞬の出来事で、こうなってしまったとは、これはこの村に住んでいる人しかわからないのではないか。

## 搜索にあたつて

副團長 森 辰 昭

思つてもみなかった、考えてもみなかった地震が、突然この静かな村を襲い、数秒という時の流れが村の人々を一瞬にして恐怖に落とし入れ、また、村内各所に大きな被害を与え、二十九名の行方不明者がいたのである。

地震から三日目、我が第三分団は十三人をのみこんだ松越地区を重点に行方不明者の搜索をする事になり、時々襲う余震の中で数十名の分団員、県警、自衛隊とともに搜索がはじまった。想像を絶する土砂と、あの広い場所が搜索を阻み、土砂の上を十秒間隔で地面深く刺す、あの一本のゾンデ（鉄の棒）での搜索、時には足を取られ腰までも土砂に埋まる状況で思うように搜索できない。

五日目ようやく重機が現地へ入った。しかし土砂が柔かく、機械力もどうにもならない状況で、作業がおもうようにいかず必死のおもいだった。早くこの土砂の中から一人でも多くの行方不明者を捜し出してやりたい。日頃一緒に飲んだ仲間も、こ

の土砂に埋まっている。そう思うと居ても立ってもいられず、分団員とともに清酒と缶酎ハイを上流より流しながら「一杯やるぞう早く出て来てくれ」と叫びながら汗と涙が……。任務とはいへ、家族と仕事のことより、まず搜索当時は無我夢中であつたが、今日になって思えば、家族の者達も自分の居ないなかで、恐怖と心細さを我慢して良く頑張ってくれたと感謝している。なかなか搜索がはかどらない。

九月二十日、ジェットポンプ二基を導入、一帯の土砂を吸い上げ行方不明者の搜索に協力をし続けたが、しかし一か月目、搜索が短縮され機械力も少なくなつてしまつた。あと一人だけ残念だ、早く見つけたい見つけてほしい。それから五日後、秋晴れの中、午前九時、泉君発見。ようやく両親のもとに帰ることができた。若き消防団員であり、今後村のために、消防に活躍してくれたのに。

この地震後一か月余り、分団長として無我夢中で務めさせていただいた。生涯忘れない体験をさせてもらったと思う。消防団員一人一人が、我を忘れ一生懸命搜索に、その他数々の活動にあたつてこられたことは、王滝村消防史にも残ることだろう。搜索にあたり木曽郡下十か町村、県下中信ブロック、上・下伊那郡の消防団、自衛隊、県警、重機のオペレーターの皆様方、



関係者各位、御協力応援をいただきまして誠にありがとうございます。

## 情報の収集、伝達について

本部 森下 厚義

情報の収集、伝達は、大きな災害になればなる程、重要な活動になりますが、今回の地震災害では、その重要性を認識させられました。村の情報伝達の方法として、有線通信放送が利用されていますが、災害発生直後には、その機能が果たされず、情報の伝達がうまくいかなかったように思います。

今回の災害は朝の割合早い時間という事で、周りの状態が確認できた事が幸いしましたが、真冬の観光シーズンで、夜に災害が発生していたら、大変な混乱になっていたと思います。また、王滝村のような山間地は、災害が発生すると、陸の孤島となる可能性があり、正確な情報の伝達に、防災無線設備があったらと強く感じました。

また、情報の収集伝達に数多くの携帯用トランシーバーが使われましたが、出力が小さいため、遠く離れると伝達しようと

する事が中継局を通さなければできなかったり、同一周波数で何台ものトランシーバーが使われているため、混信したり、重要事項の伝達中に割り込みがあったり、最初のうちは思うように伝達機能が果たされていなかったように思います。また、数多くの報道関係者や、取材用ヘリが飛びかう騒然とした雰囲気の中で、避難準備が避難命令として伝わり、大きな混乱をまねきました。

情報の収集、伝達は、伝達する方も、受ける方も、正確で確実な情報でなければなりません。また、正確で確実な情報が得られても、伝達の段階で機能が果たされなければ、なんの役にもたちません。大きな災害の時にいてこそ、冷静に行動できるように、また、正確で確実な情報を収集して、正確に伝達できるように、ふだんの生活や訓練によって、身につけておく事が大切だと思います。

## 行方不明者の搜索

第三分団 家高 弘文

あの忘れもしない九月十四日、あれからもう九か月が過ぎよ

うとしています。私は丁度その時王滝にはいませんでした。王滝が震源地であり大被害を受けたという事を知った時、すぐ電話を入れたのですが不通であり、何の正確な情報も知る事ができないまま、ただ身内の安全を願うだけで、ひたすら車を王滝に走らせていました。村に近づくにつれて、所々で落石や道路の陥没が見られ、被害の大きさにびっくりし、胸が締めつけられる思いでした。自分の家の被害もよく把握できないまま、連日行方不明者の捜索にあたりました。東地区の不明者があがるたび、一人も残らず全員発見することに意をもやし、行方不明の同僚を目の前で発見できた時は本当にうれしく思いました。

消防団の一員として今回の地震災害で、その使命達成の責任を果たし得た感激は終生忘れる事はできないと思います。今回の地震による教訓を今後の消防活動の中に生かしていく事ができれば幸いだと思っています。

## 行方不明者の捜索

本 山 下 正

忘れもしない九月十四日、人々はごくあたりまえの生活を

送っていた。しかし、突然八時四十八分村を中心に強い地震があった。それまで平和だった村が、一瞬のうちに悲惨な状況に変わった。しかし、僕は頭の中で整理するのに時間がかかった。

九月十五日、僕は朝から「ボカン!」と空をながめていた。

九月十六日、初めて行方不明者の捜索に行った。ただ、泥の中に竹ざおをむなしく差し込むだけで、人間の自然の猛威に対する限界を感じた。その日は数名が遺体で発見された。

九月十七日、人々から送られる救援物資を運んでいた。また空を「ボカン!」と見ていた。

九月二十三日、木曽郡下十町村の消防団員が応援に駆けつけ大規模な捜索を展開、しかし誰も発見されなかった。だが、みな顔に発見しようとする気持がうかがえた。気持とは裏はらに、やはりそこでも人間の力のなさをまざまざと見せつけられた。

そのような日々が何日も続き、ただあきらめだけの気持が、土にささるスコップの深さに表われてきた。柳ヶ瀬地区に捜索にも行ったが、あまりのひどさに、ただ歩き回るだけで、何もせずに帰ってきた。

人間の命がかくも簡単になくなってしまふ。やはり人間の力では自然の力には勝てません。

一日も早く末発見の人達が見つかることを望んでいます。

—安らかに眠ってください—

## 「長野県西部地震」その日

第二分面 脇坂孝雄

仕事を始めたばかりだった。突如「グラグラ」と、工場内のリフトに乗せてあった車が落ちそうな程揺れているのを見下ろした。外へ飛び出したが、まだ揺れている。これはすごい地震だと感じ、震源地は大変なものだろうと思った。家から電話が入り、家の中がめちゃくちゃだと言う。その時、またかなりの揺れがあり電話を切った。今度こちらからかけたが、もうつながらない。これはおかしいと思い、昼頃には会社へもどるという事で、福島から王滝へ向かった。途中、県道には石がごろごろしていてなんだか無気味。二子持まで来ると、ごうかけの所が崩れていて通れないとの事。それで村道へ回ったがこちらもしどいものでやっと崩れまで来た所、大きな石が道の真ん中にあり、数人で車を置いて歩いた。

東地区の上からざっくりとぬけて、生コンのあった所もない。

橋もない。すごい地面を見た。えらく崩れたものだと思いますが、家へ向かった。野口へ行くにも、やっと通れる位の所があり、かわらの屋根は崩れ落ちている。鈴ヶ沢の近くまで来た時、変な音が間を置いてゴーガーと聞こえる。川の中で重機で仕事でもしているのかと思いが……。それにしても人の姿が見えない、どういうことか？ これだけの地震があったんだから、家のそばとか、その辺にいるはずと思っていた。そうこう思っていると橋の所まで来たら、上の方から、水ではなく土砂が波をうって押してくるのが見える。それも橋のすぐ下までついている。これはすごいものだと思いの間見ていた。もしかしたら橋が落ちるかもしれないと思ったが、走って渡り、おそろしい物でも見たように感じ、ふり返りもせず家へ。やっと着いた家の戸はあけっぱなし。誰もいない。そこら中ちかっている。学校へ避難したという置き手紙があり、学校へいそいだ。かなりの人が校庭に集まっている。話を聞いているうちに、だいたいの事がわかってきた。家の者に会えて一応安心したが「行方不明の人がいるとの事」「震源地が王滝」だとわかった。その夜から消防団としての活動が始まった。

## 西部地震の体験

第二分団 渡辺貞広

今から思うと九月十四日の朝からの雨は、無気味で幸いの雨だったかもしれない。いつもあの程度の雨なら作業員は出勤してくるわけだが、だれも出てこなかった。いそぐ現場があったので、私一人だけ大鹿の現場で重機にのり作業をしていた。すると間もなく「ゴォー」という音とともに廻りの山からは崩落、落石、道はふさがれてない。水ヶ瀬瀨は土石で埋まってしまった。余震がおさまるのを待ち十層もある崩落の上をとび越し、水ヶ瀬の貯木場へと走った。だがだれもない「おーい」と呼ぶと、山の上から「三浦ダムの水がくるぞ」ときんできた。家族が心配になり、家にもどると言って落石の上を越え走った。途中で野口の住民に「てっぼう水がくるぞ」と呼び続けて家にもどった（この時はまだ水ヶ瀬の土石流、火事は発生していなかった）。家族は学校に避難している。学校へ行き、顔を見るとホッとした。しかし、生コン工場、東の公民館は跡かたもなく、プラントは三十層も押し上げられている。すごい土石流、崩壊だ。

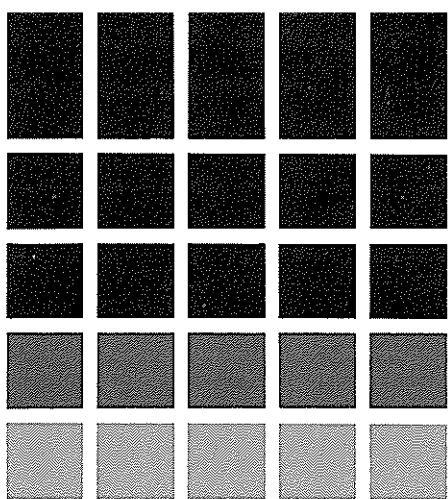
まず人命救出だと思い、消防団の活動にくわわった。東地区の崩壊現場附近の住民を避難させ、土石流方面に向かった。これは地獄だ。だが、この中に何人かが埋まっている。それも知っている人、毎日顔を合せる人ばかりだ。なみだが出てしまった。あまりにも大きな土石流で手も出せない。「オーイ、オーイ」とさけぶしかなかった。残念でしかたなかった。その夜は学校で待機。しかし、寝ることはできなかった。つぎの日の朝、二合目奥の方から土石流が発生とのことで、自衛隊のヘリコプターで住民の救出に向かった。まず子供と老人をヘリコプターに乗せる。ヘリは五、六人しか乗れない。三十人以上の全員を救出するには五、六回ピストン輸送をしなくてはならない。無線では早くしないと土石流がむかってくると伝えてくる。不安ばかりが心を横ぎっていく。もうだれもないか、全員救出できたかと他の団員にきくと、老人夫婦が家に残っている。「早くしろ」とどなってしまった。だが全員ヘリにのった時はホッとした（後で聞くと、土石流は発生していなかった）。

それから土石流の中の搜索救出は大変でした。ひざまで埋まる中を長い鉄ぼうを持って土の上からつきさしてさがすが、まったく手がかりはなかった。また救援物資の受けいれ作業が毎日続いた。

自衛隊、警察、隣接の消防団のみなさんの救援、全国からのあたたかい救援金、物資、隣町村の協力本当にありがとうございました。二十九名の尊い犠牲者のためにも一日も早い王滝村の復興にがんばりつづけます。







# 座 談 会

出席者



王滝村消防団長  
前王滝村消防団長  
前王滝村消防団副団長  
前王滝村消防団第一分団長  
王滝村消防団副団長  
王滝村消防団副団長  
王滝村消防団副団長  
王滝村消防団本部長  
王滝村消防団第二分団長  
王滝村消防団本部ラッパ隊長  
王滝村消防団第二分団班長  
王滝村消防団第一分団班長  
王滝村消防団本部消防主任

(司会)

村木 与助  
滝正 昭  
下村 勲  
工藤 伯雄  
森 辰昭  
下出 弘夫  
稗田 敏彦  
中越 学  
小谷 正夫  
西村 勲  
三浦 稔  
西村 祥夫  
皆戸 育夫





## 発生直後に何をしたか

村 木 地震が発生する前に何をしていたのか。また、地震が起こった瞬間どのような行動をされたのですか。

稗 田 役場に勤務しており、地震だと感じた直後にロッカーが倒れ、壁、蛍光灯がぐずれ落ちはじめ、これは大きな地震だと考えました。周りの様子は覚えていません。情報を私の所で集める予定でしたが、電気、有線放送、電話等が不通となり、ただひどい事態であるという情報しか入りませんでした。

下 出 当日は松本へ出張しており、今朝の地震は山梨か東北方面という情報を耳にし、気にもせず研修を進めていたら、遅れてきた同僚から王滝村が大変な被害であることを知らされ、王滝へ何回か電話したのですが不通で連絡がとれず、車でとび帰ってきました。十九号線を走っていると頭上を自衛隊のヘリコプターがゴンゴンと王滝の方へ向かっており、前方をみると自衛隊のトラックが連なっており、不安の中、王滝へ向かいました。二子持に非常線がはられており、事情を

話して通ってききましたが、村道一号線は落石、亀裂、陥没と荒れ果てた状態、そしてしばらく行くと松越地区の大崩落を目にし、何／＼これがあそこかという感じで見ながりました。村に着き学校グラウンドで多くの村民たちと会い、ひと安心して役場の勤務につきました。

森 私とは奥田商店にいましたが、その瞬間、棚に陳列してあったビン類の触れ合う音が六、七秒あったと思いますが、とっさに店内のお客一人と店員三人で表へ出るのが精一杯でした。一時間程たったあと森本美世さんが流され無事救出されたことを知り、これはえらいことが起こったと実感しました。

皆 戸 私とは名古屋の方へ仕事にいており、車のラジオで今朝の地震は王滝村と知り、その衝撃はものすごいもので動転してしまい、車を止めてタバコ屋だったと思いますが、電話器へ十円玉を入れようとしても手が震えてなかなか入らなかったのを記憶しています。これはいかんと思い稲沢の警察にとび込み、木曽警察署と連絡をとってもらいましたが、王滝の情報は全然入っていないことでした。とにかく早く帰ろうと思い、高速道路に入り王滝へ向かいました。背広に革靴ですから雨が降っていると聞きまして中津川のスーパーでカップと長ぐつを、上松では食料品を確保して帰って

きました。木曽福島に入り災害情報がラジオに入り、森林組合職員等の行方不明者の名前を知りました。崩越の公民館前で胡桃沢寛司さんや学生たちに会い、被害状況を聞き、大変な事態になったと思いました。

滝 私は松越の崩落地の前にあります製材工場におりました。

ドーンという音とともに三つぐらいある製材機が全部脱輪し、あらゆる木製品がたおれてきました。なお余震があったので外へ飛び出せということで全員の安全を確認して裏を見たところ、前の松越地区が完全に落ちておりました。そこには十八人いましたが、落ちた瞬間を見た人は誰もいませんでした。そのような惨状からこれは大変なことだと、団長としましてすぐ役場本部へ向かいました。ところどころ石垣は落ちているし、お年寄が道端へ出てちよっとしたバニック状態が起きていました。役場へ着いて第一報が甲府が震源地であるというNHKからの情報が入り、王滝がこれでは長野、松本は王滝以上の被害がでているであろう、長野県はまずダメではないかというような感じをもちました。それから十分後に王滝が震源地であるとわかり、村として今後どうするかということを実剣に考えだしたようなわけです。

工 藤 私は役場の二階で運転手たちと話し合いをしておりま

したら、ガタガタとゆれだし、ロッカーが倒れたり、書類が飛んでくる。これは地震だと、しばらくして学校の方をみたら子供たちが見え、学校は騒がしくなかったからもう大丈夫だと思い、二階の倒れた石油タンクを同僚たちと直し家へ帰りました。そして消防服に着がえ、となり近所のガス栓を締めていたら、近くの人から東の森本さんの所がぬけたことを知らされ、その時はじめて王滝が震源地ではないかと思い、急ぎょ役場へ飛び帰りました。

中 越 私は木曽福島へ仕事に行っておりまして、八時三十分頃から気持の悪いゆすり方で地震があり、自分として今日はいやな日だなと思って同僚とタタミを縫っていました。八時四十分頃ですか、障子はずれたりして余震も続いていましたが、まさかと思って仕事をしておりました。十時のお茶を飲んでいたら甲府が震源地じゃないかと福島の人が出ていまして、それで安心して仕事をしていたところが、よその業者から王滝の方はすごい被害だということを聞きました。まさかあんな大きなものだと自分でも想像が付きませんでした。近くのテレビを入れたけれど映らなかったの、まあ仕方ないと思って十二時まで仕事をしており、別の部屋のテレビを入れてみたところ、松越地区の崩落現場がボッカ

リと映り、「アッ! これはいかん」と、消防団員であり、家族のことも心配で、あわてて弁当も食べずに帰ってきたわけです。

西村(祥) 当日は家におりまして最初はあまり驚かなかったし、家の中もかなり痛んでおりましたが、あれほど村の中がひどい状態とはわからなかったですね。王滝とわかったのは昼ごろだったと思います。それからやっと消防団についた状態です。

小谷 ぼくは農協に勤めていますが、直後は車につかまっているのが精一杯で、役場の屋根の瓦などが割れて落ちてくる恐ろしさを見たこと、それから農協事務所へ入ったところが職員が金庫の下になってしまいい助け出し、店の方ではお客が物の下敷きになっていたのでみんな助け、それからガス関係の見まわりをし、消防団の方へついたわけです。

三浦 当日はバスの運転で、六時半頃飯田の方へ仕事に行きました。地震の事は全然知らなくて飯田へ着いたのが十一時頃だったと思います。そして仲間の一人が二子持へ電話をかけたところ、王滝が地震だということで、私もそんな馬鹿なこととはないと信じていませんでしたが、電話もなかなか通じないし、テレビを見ていたら三沢地区の状況が映しだされ、あ

わてて王滝へ引き返すべく飯田を十二時頃出発し、二子持へ着いたのが一時でした。道が通れないと言うので四時半頃まで待って、営林署の乗用車で帰ってきました。

西村(勲) 私は南木曾営林署に行っておりまして、現場事業所で電話をしており蛍光灯がガタガタゆれましたが、まさか王滝で地震があったとは思いませんでした。十時頃だと思うが現場から電話が入り、ラジオで「王滝の方が……」ということ、作業員も私の家のことを心配してくれたが、自分の家のことを心配するより職員の事が気になったわけですが、十一時すぎに現場を出発したような状態で、王滝へ帰ってびっくりしたわけです。

### 避難体制と情報伝達

村木 皆さま方より地震発生時の状況等をお聞きしたわけですが、団員の中でもかなりの方が村外へ出ていたようですが、団員の招集などにつき、滝団長としてどのような指示をされたのですか。

滝 とにかく停電、有線放送の故障、電話の不通などから、団

員の招集については大変悩みましたが、まず最<sup>しやう</sup>奇の者から声をかけ、連絡のついた者には消防自動車につけ、無線から集める事を考えました。村外へ出ている団員も三分の一以上おったと思います。半鐘をたたくということもやりましたが効果はなく、最終的には自主的に本部に集まっていたいたという状況でした。

村 木 消防団としていろいろ大変なことがあったわけですが、その中で最初にやられたことはどんなことでしょう。

滝 まず少ない団員の中から、住民の避難誘導を行いました。消防車で呼びかけましたが、自主的な村民の動きによって、大きな集落のほとんどが学校校庭に集まりました。野口地区は崩落による増水が予想され、上の国民宿舎への避難を呼びかけました。九蔵地区の場合は完全に道路が寸断され、消防団員が崩落地点まで車で行き、徒歩で誘導してきました。二時間後には電話が一本つながり、区長さんと話し合いができて、小川地区集結ということになりました。

村 木 消防として避難誘導、避難指示をしたということです。が、村民の中では大きな余震が続いている中、また土砂が落ちるのではないか、あるいはダムが決壊するのではないかと、いろいろな想像の中で自主的に避難されたということでは

が、一番困難だったのは有線放送の使用不能ということで、消防団でも苦勞した点が多かったわけですね。もう一点滝さんにお伺いしたいと思います。が、今、総合訓練などで避難訓練なども各地でやっていますが、たまたま王滝の場合は防災計画等も立案されている中で、そういうこともやっていたわけですが、その点についてはいかがでしょう。

滝 やはり村民自体が、広くて地盤が固いという考えから学校校庭を選んだと思います。また、学校が授業中だったため、子供のすべてが校庭に集まったことから、父兄など集まれる人は校庭に集まったものと思われます。

村 木 今回の場合は、特に大きな地震でしたが、家屋の倒壊も少なかった中で、村民も自主的に避難されたということで、訓練されなくてもできたということが言えると思います。このような状態の中で火災が一件発生したと聞きましたが、その対応については……。

滝 営林署の貯水場で発生し、消防団第二分団の出動命令をだしたわけですが、道路が不通で消防車が通行不能のため一旦引き揚げさせました。その後、土石流がおしよせ、幸いに燃えている一帯を泥と水で沈火した状態となり、大した被害もなかったわけですね。

村 木 地震が発生したときは火災が起こることはよく耳に

ますが、王滝の場合はそういう二次災害的なことは起こらなかったことについて、住民がどのような対応をしたかということについて、西村班長のように感じていますか。

西 村(祥) 火災が発生しなかったということについては、まず時間的にはほとんどの家庭で朝食が済んでいたことです。子供が学校へ行くのが、特に中学生をもつ家庭は早いということもあって、朝食が済んで、火を使っていなかったということが一番の要因だと思います。地震の際には、まず火災防止ということでガスの元栓をしめるとか、灯油関係をチェックするとか、かなり住民の人が徹底して頭にあつたと思います。村 木 もしあの時火災が発生していれば相当の被害があつたと思われませんか。

西 村(祥) そうですね。車は動けないし、水が出ないという状態で、また、人もいないという中で、まったく手がつけられなかったのではと、今から考えれば思います。

村 木 住民が火に対してすばやく対応してくれたということ、王滝村は助かったわけですが、消防として火を使わないようなPRなどの処置をしたのか、小谷分団長いかがでしょう。

小 谷 王滝の人は火の事は第一条件として頭からはなれなかったのではないかと、食事が終わったら必ずガスの元栓をしめるというくせがついていたという感じがしている。

滝 それについては農協で点検したところ、七十五%以上の家のガスの元栓がしまっていたと、農協の所長がほめておりました。

村 木 消防団で火を使わないよう広報したと聞いておりますが。

小 谷 消防でも消防車を使い、全区に手わけしてマイクで呼びかけ回りました。

村 木 消防団も当日夕方には逐次集まりまして約八十%位に なつたと思います。その中で体育館、学校が消防団の詰所兼避難場所になり、余震も続き不安の中で過しました。このような状況の中、道路の開通、電気、電話の早期復旧等により、山間地で孤立する状態になるのを幸いにも免がれたわけです。一部滝越、東地区では孤立の状態がありましたが、次の日に自衛隊のヘリコプターにより学校の避難所に集結できました。この中で十二権現の崩落により老人一人がとり残され、夜間団員二名を派遣したこともありましたが、二次災害的な心配がある中で、こういう行動がとれたということは、

いずれもよかったことではないかと思われまふ。当日はいろいろ混乱する中で、避難誘導が重点的に行われましたが、滝団長におかれまして村の対策会議の開催される中でいろいろ指示されたと思いますが、対策会議のあり方についてどのように感じておられますか。

滝 はじめての経験でしたので最初は右往左往の状態で、消防、役場、警察、自衛隊等、バラバラな活動でしたが、情報が序々に収集されるにしたがつて、搜索、誘導、警戒など軌道に乗ったと思います。翌日からは県が合同しましたが、消防団としてはいろいろな事をやっていかななくてはならぬ、早く言えば雑役係という感じで、食糧運搬から避難誘導、あるいは給水、食糧配布、自衛隊と警察の現場案内など、当初は搜索まで手が回らなく、三日目ぐらいから搜索に入ったような状況です。当日の夕方の対策本部会議では大体の命令系統がまとまり、その後はスムーズに動いたように思っております。

村 木 最初の晩の対策会議で、交通整理とか夜警を消防で行うということで、団員に指示して対応されましたが、これは誰がやったのですか。

工 藤 各分団わりで数名ずつ時間交替制で動いたと思います。

滝 崩落危険地帯の道路確保ということで、各分団から三名ずつ二時間交替で組ませました。

村 木 報道関係者の規制についても大分苦労したのですが、森副団長のように感じましたか。

森 報道陣が警戒を突破して立ち入り禁止区域内に入ってきたり、学校の避難所に入ってきてマイクをつきついたり、強引に取材をすることが多かった。

稗 田 役場においても、情報収集、被災者の救助など本来の仕事に支障をきたしました。最終的には報道関係の係に三名あてて対応したわけで、二次災害的な感じもしました。

滝 報道陣についてももう一つ感じたことは、報道関係者の車で狭い道路が片側通行になってしまい、多くの支障をきたしたという被害もみのがせない。私は警察署長に「何とかできないか」と言いましたが、報道関係の車は緊急車輛に準じているので、警察としては文句を言えず、取り締まれないということでした。このことについては今後考えてもらいたい。

村 木 報道の暴力みたいな感じも……。それと、みんなが避難しているのに空家に入りこんだりとか。

稗 田 モラルがなかった。それが当たり前だと思っているんじゃないか。

滝 立ち入り禁止区域内に入っても、警察も追い返せないし、我々は報道する義務があるという意識が強い。

村 木 次に飲料水の供給について濾過器を設置するまでの間、消防団である程度対応しましたが、日本消防協会から濾過器二基を持ってきてもらい設置した経過もありました。

滝 大変ありがたいことで、二日目の昼すぎには濾過器二基が王滝村消防団へ届きました。木曽保健所にも一台しかなく、他町村にもない所が多く、これにより学校の水道に取りつけて給水車で各地区を回りました。この二基は大きな働きをしたと思っています。

村 木 私たちの上部機関で、このような対応をしていただいたことは、非常にありがたいことでした。

滝 非常に高性能でしたね。一基八十万円位するらしい。

村 木 話しは変わりますが、私は森副団長にたのんで、裏山の亀裂について対応したことがありますが、森副団長、その辺の状況を。

森 三日目だと思いましたが、十四、五人の編成を組んでシート三十枚かつぎ上げ、割れ目にかけて応急処置をしました。亀裂は幅八十センチ、距離にして長い所は十メートルでした。

村 木 裏山についてはデマ情報もあったようでパニックが一

時あり、情報伝達のむずかしさを感じたわけですが、この辺についてどうでしょうか。

滝 デマの情報が流れたのは、十七日の四日目だった。あれは自衛隊の総長が偵察に来た時、ヘリコプターの操縦士が変わったことにより、自然ダムの土石流が動き出したということから、村の対策本部で避難準備をしろという放送をながし、本部でヘリコプターにより現場へ急行したが異状がなかった。今度は報道陣が学校の庭から見て、山が動き出したという情報が入ってきたわけですが、私は危険を察知するあるいは予告以前に、デマで多少のパニックはあっても、万が一の事を考えれば避難命令を出すとか、行動を起こさせるのは正しい事だと思っています。デマの情報により行動して事故がなかったから幸いだと考えるし、可能性のある限りは、事前に命令を出して避難させるのが本部としての務めだと思えます。

村 木 私は住民の方から裏山の石がころがっていると聞き、避難させたこともあったわけですが、避難させて後でおこられるのは結構なわけで、何かあった場合は遅きに失するということ、後でデマ情報がいろいろ言われたわけですが……。滝 あれは報道陣がさわいだのみで、大したパニックではな

かった。三十人か四十人ぐらいで新聞、テレビで大きく報道されてしまった。

下 出 私は役場の仕事として裏山へ上りました。余震がくる中で石はボロボロ落ちており幕岩も一枚落ちていました。松越方面の金比羅様の上には無数の亀裂があり、幅八十センチ、深さも一層五十センチのものがあつたが、役場の上については部分的な亀裂で、裏山がぬけるということは感じなかった。

村 木 住民が不安の中では、ちょっとした伝達でもいろいろな形で表われてくると思われます。

滝 だから早急に有線放送が回復していればあのようなこともなかったと思うし、あのような状況下では、非常事態が起きてしまった後よりましではないか。

### 長期にわたった搜索活動

村 木 それから私たちの活動の中で、一番大変だった行方不明者の搜索活動についてお話したいと思っています。

滝 三日目から搜索活動に加わったわけですが、役場の職員を除くと八十名しかいない消防団員では、連日行うことは大変

なことであるので、当初の一週間は全員出動の形式をとりましたが、その後は一日おきの交替制にしました。消防団員も熱心にやってくれまして、当初確保の人員より三割ぐらい余分に出ていただきました。出る人は連日搜索活動をしてもらったわけです。しかしあのような搜索範囲になると、王滝村消防団では手がつかなくなって、まず郡内の消防団に応援をたのむことになり、連日五百人程度の応援を一週間くらいお願いしました。こうした中で県の消防協会長が大変心配してくださり、県からも出そうということで、一日だけですが約千人の応援をいただきました。ただ、私共のような小さい消防団では、よそから来られるとその対応が大変で、実際の活動が出来なくなってしまう。極力辞退もしましたが、災害の現状を見てもらうだけでもということから好意に甘えた次第です。以上のようなことから人的には限りがあり、バックホーなどによる機械搜索も行われました。

下 村 私は濁川地区における重機搜索の総指揮をまかされましたが、二十数台の重機をどのように使っていくか大変悩みました。ちょうど戦車に責められるような状態の中で、重機に詳しい人と相談しながら、どうにかこうにか搜索を行ったわけです。



村 木 搜索活動も十一月二日の打ち切りまで、五十日間の長期にわたったわけですが、その他で感じられたことはどうでしょうか。

森 最初はゾンデの搜索で行方不明者は見つかりましたが、その後あの土砂量の中では、ゾンデでは到底できないことがわかり、ジェットポンプを投入し、我々団員は全部それにとられてしまいました。

滝 ジェットポンプは無駄だと思ったが、厚生省で決定されたので使わざるを得なかった。そういう無駄の中で、地元では多くの人間を必要とするし、ましてこんな小さな村においては考えざるを得ない。

下 出 ゾンデも足りなくなり、竹の棒を何十本か用意して使用したが、土砂のため割れて通用せず、柔らかな現場の搜索のため踏み板が必要ということで数百枚使いましたが、やはり一番役に立ったのは重機ということでした。

滝 重機については、土砂が固まってきた状態ではじめて使うという知恵が浮かんできたが、当初は重機が入れる状態ではなかった。

下 出 最初はヘリコプターで鋼板を敷いたりもしたが、豆腐の上に鉄板を敷いたようなもので仕事はできず、水底を掘る

浸漚しゅうせん船で行うという話もあったが水が少なすぎて入れない。それではどうしようということで土壌凝固剤を使用しました。

滝 凝固剤は地下三十センチ程度しか固まらなく、重機は無理だったな。

下 出 水資源開発公団としては、飲料水に使うダムの水にそんな薬剤は使わなくてくれということでしたが、水質汚濁などの検査結果も出すからということで了解していただいた。結果的にはあまり効果はなかった。

村 木 消防団の出動は最終的に千二百五十一名で一人当り十五・五日搜索活動を中心に出動をいただいたわけですが、家庭の事情、企業との関係はどうでしたか。

滝 私は家庭の心配はありませんでしたが、仕事面では社長の理解があつたにしろ、一か月余出動しなかったことに精神的負担はすごく感じておりました。ですが他の団員の件で二、三の企業から抗議の電話もあったことは事実です。いずれにしても非常勤消防団員である以上、その苦勞は絶対にあると思います。また、消防団の三分の一を占める役場の職員については、私の判断で役場の勤務についていただきました。

下 出 役場の職員も団員でありながら消防団活動ができない

というジレンマもあり、一日でも現場へ出て捜索したかったと思います。しかし、あくまで公務として全村民を守る立場にあり、消防も役場も大事でやりきれない感じをもちました。

三浦 私は営林署なので気楽にできた感じもありますが、実情は山仕事もできない状態でしたし、電話をもらえば優先的に参加しました。

滝 それにつきましては営林署長と話しまして、当分仕事ができない状態の中で、二週間の特別休暇を与えているというこ

とで、必要な時は電話して出勤願いました。

村木 中越さんの場合は、自営業の立場として大分苦労されたと思いますが。

中越 災害の中で仕事はまったく手につかなかったわけですが、家族と年寄りには避難しておりましたので、家へ帰っても家庭を整理する余地ありませんでした。自由業ですからその点は気楽に消防に従事しました。

村木 消防主任の場合は、役場の立場と板バサミの中でどのように感じられましたか。

皆戸 役場の仕事も異動により変わったばかりで、防災計画も目を通してなく、また、災害救助法というのも初めて聞いたようなわけで、防災担当として役場の仕事だけで手一杯で

した。

村木 防災計画についてどう感じていますか。

皆戸 今読んでみて、非常によくできていると思います。地震の対応はある程度でき、そんなに的はずれの計画にはなっていない。

村木 計画はあったが、みんなに周知徹底していなかった。

滝 防災計画は、昨年の三月の防災会議により手直しすることになっていました。その後災害になったわけで、実際は避難場所、交通関係などに不備な点はあると思いますが、計画はあくまで机の上で作ったもので、あれを全部覚えていない。要点を覚えることが大切だと思う。

皆戸 でもよくできている。あの通りやればできる。しかし、災害になった時に読もうとしたってそんな暇はない。ふだん勉強しておかなければ……。

滝 立派な計画書があっても突発的な災害には対応できないと思う。ただ、災害というのはどういう形で発生するのか未知であるので、防災計画に載っている防災訓練をどういう形で進めていったらよいか、考える必要があると思いますが。

村木 今回の長野の地すべり被害等を聞く中で、やはり住民と連携をとって進めること。また、一つ一つの防災訓練の積

み重ねも大切だし、防災意識の高揚もあると思います。

稗 田 避難所のことですが、学校が本当に安全なのか、震度六に耐えられる構造であるのか、私は当時余震が起こるたびにそういう不安がありました。

滝 あの状態においては、多くの人が集まれる場所として学校しかないし、一般の人はできる限り村外へ出すという処置をとりました。学校の場合は、避難所というよりも集結場所という見方をしたい。

村 木 その他に今後問題点として考えることがありましたらお願いします。

下山 王滝川に土砂が流れこんで河床が上がっており、降雨時の場合かなり水位も上がるので、警戒体制が必要になってくるのではないかと。昔は二千リットルの水が流れることになっているが、今では松原地区に浸水してしまう状態にある。

滝 これには洪水警報が出たときは警戒体制に入っていくという対策を講じていかなければならない。また、あれだけの地震があった後では、もう少し監視を続ける必要があったという気がしています。しかし、いたずらに有線放送を流すとか、住民に不安感を与えることは問題である。

村 木 長時間いろいろお話しをしていただき、反省点、問題

点等もあり、今後においては防災訓練、危険個所の把握など、消防として数々の課題があるわけですが、今回の地震を教訓に消防団活動を充実したものにしていきたいと思えます。どうもありがとうございました。



## 追悼の言葉

王滝村消防団長      村 木 與 助

突然襲ったあの忌わしい「長野県西部地震」、全国民の目が王滝村に集中した昭和五十九年九月十四日は、私達にとって生涯忘れられぬできごとであり、忘れられない日となってしまいました。

地震によって、村の五か所で大規模な法面崩壊、地すべりが発生し、この土石流により二十九名の尊い命が一瞬にして奪われてしまいました。犠牲となられました皆様方、また森林組合の職員の方、御岳生コン、城田建材の従業員の方、濁川温泉旅館の方、皆、その企業の中心的立場で活躍されていて、かけがえのない方々であり、運命のいたずらとは申せ、こんな無情で悲しいことはありません。誠に残念です。

消防団も泉和視君、田中千里君、半場卓也君を亡くしました。過疎化が進み、団員も年々減少、「今にも百名を割るのではないか」と心配されている時、一人でも二人でも入団者を求める中で、三君は団の中堅として活躍を期待される方であり、本当に惜しい人を亡くしました。

また、消防後援隊長の正沢方司氏も今回の犠牲になりました。消防団の先輩として私達の指導的な立場で何かと助言もいたしており、後援隊長を永年勤められ、村、団としても重鎮を失ってしまいました。遺族の皆様の心中を思う時、その悲しみはいかばかりかと……何と申し上げてよいやら……今は亡くなられた皆様の御冥福をお祈りし、哀悼の意を表したいと存じます。

全国各地でいまままでに数多くの地震が発生しております。報道等により、人的物的両面の大被害を聞く時「恐ろしい、本当に気の毒だなあ……」とそのつど感じ、自然の猛威、力に驚かされておりましたが、いざ自分達が今回の地震に遭い、今更ながら怖さを身をもって実感、自分も発生時間が違っていたならばあの土石の中にうまったかもしれないと思うと、なんとも言えない運命のはかなさを身にしみて感じます。「地震国日本」と言われており、いづどこに、どんな地震が起こるかわからない現在、観測、予知体制がとられ、災害を未然に防ぐことが一番大事なことです。今回の内陸直下型地震の教訓を生かし、今後、地震対策が十分実施され、一人の犠牲者も出さないことこそが、亡くなられた皆様への供養になることでしょう。ありし日の皆さんの面影が、元気な姿が、今でもありありと思い浮かんでまいります。

犠牲となった皆さんの教訓を生かし、さらに村一丸となって防災訓練も行い、災害に備える努力もしてまいります。今、王滝は復興工事が急ピッチで進み、元の姿にふみがえり、明るい平和な村にもどれる日も、もうすぐです。

皆さん王滝村を見守って下さい。御霊の安らかならんことをお祈りし追悼の言葉といたします。

# 震災活動日誌

昭和59年9月14日

- 避難指示出る(村全地域)
- 災害救助法適用
- 災害対策本部設置(役場内)
- 自衛隊救援要請
- 消防団出動(六九名)
- 鼻戸地区の救出(二名)
- 非常線配備
- 夜警(三班編成)
- 各避難所の警戒
- 消防本部を小学校に設置
- 第一回本部会

9月15日

- 日本消防協会(救援物資)災害地視察
- 消防団、県警、自衛隊で不明者の捜索開始(東地区)
- 東地区の救出
- 老人の輸送の応援
- 村内の交通整理
- 夜警(三班編成)
- 各地区の被害状況調査開始
- 不明者一名発見

○氷ヶ瀬地区偵察(第二分団 五名)

9月22日

- 郡中部ブロック消防団員応援四日目(二五六名)
- 愛知県岡崎市消防長来村

9月23日

- 消防庁長官災害地視察
- 郡下十か町村消防団員応援(四〇〇名)
- 森林組合作業所発見
- 災害救助法延長

9月24日

- 郡下十か町村消防団員応援二日目(三九一名) 四地点捜索
- 不明者一名発見

9月25日

- 東地区、西地区で不明者捜索

9月26日

- 東地区二か所で捜索

9月27日

- 東地区二か所で捜索
- 災害救助法延長

9月28日

- 東地区三か所で捜索

9月16日

- 山林災害調査
- 小川地区の応急復旧
- 食事の手配
- 救援物資の受入れ
- 村道一号線の交通整理
- 夜警(全員)
- 不明者四名発見

9月17日

- ポンプ操作三班編成して捜索

9月18日

- 開田村消防団応援
- 不明者二名発見

9月19日

- 郡中部ブロック消防団員応援(一七一名)
- 信越放送臨時ラジオ局開設
- 災害救助法七日間延長

9月20日

- 郡中部ブロック消防団員応援二日目(一七四名)
- 柳ヶ瀬地区へ偵察(五名)
- 神奈川県藤沢市消防局四名来村

9月21日

- 郡中部ブロック消防団員応援三日目(一六五名)

○ジェットポンプ一基設置(可搬ポンプ三台併用)

9月29日

- 東地区四地点捜索
- 不明者一名発見
- 中信地区消防団へ要請

9月30日

- 東地区、王滝村消防団で捜索
- 郡下十か町村消防団員応援三日目(各団編成、西地区)
- 不明者一名発見

10月1日

- 東地区での重機の引きあげ

10月2日

- 東地区二か所で捜索

10月3日

- 雨天のため捜索陣待機
- 野口、氷ヶ瀬、九蔵巡視
- 不明者一名発見

10月5日

- ヘリコプターによる巡視

10月6日

- 氷ヶ瀬、柳ヶ瀬地区への橋の架設

○甲府消防団二十名来村

10月7日

○中信地区、郡下十か町村の消防団員応援

(一〇〇〇名、柳ヶ瀬、水ヶ瀬地区)

○県消防協会長、消防庁次長、県防災課長来村

○柳ヶ瀬地区の不明者家族に捜索の説明

10月8日

○十二権現方面災害巡視

10月12日

○災害救助法延長

10月13日

○自衛隊全面撤収

○不明者の捜索延長

○不明者一名発見

10月14日

○県警撤収

○東地区四班で捜索

10月15日

○政府調査団視察

10月16日

○一部激甚災害指定

10月18日

○坂城町、上山田消防組合視察

○不明者一名発見

10月19日

○災害救助法延長

10月21日

○濁川温泉附近巡視および捜索

○村内の防火水槽被害調査

10月24日

○災害救助法延長

10月26日

○避難指示解除

○柳ヶ瀬地区不明者家族打ち合せ

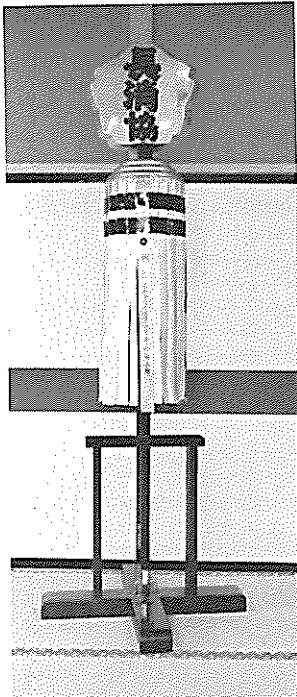
10月28日

○西地区で捜索

○十二権現、滝越巡視

11月2日

○不明者捜索打ち切り



## 表彰状

王滝村消防団

貴消防団は昭和五十九年九月十四日に発生した長野県西部地震災害に際し、全国員を協力して行方不明者の捜索活動等に連日連夜献身的な活動を行いました。その功績は多大であり、消防団の忠鑑であります。よってここに現場功労章を贈り表彰します。

昭和六十年一月一日

会長 長野県消防協会

会長 木内治三郎

(財)長野県消防協会会長表彰 (昭和60年1月1日)

## 表彰状

王滝村消防団

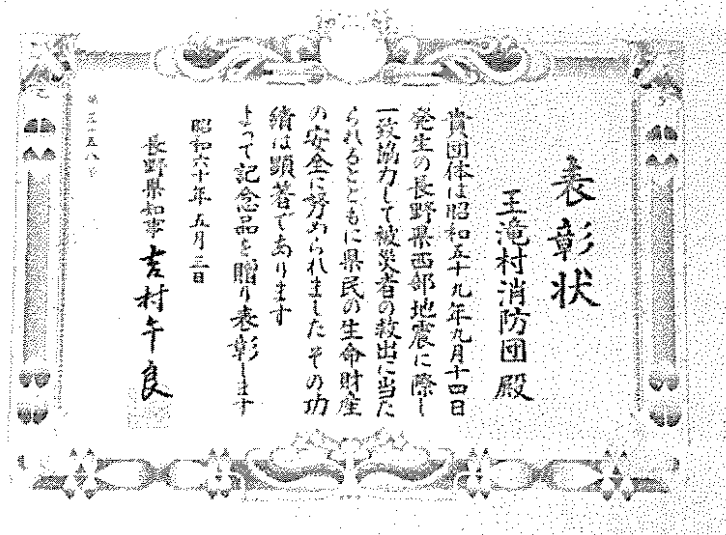
貴消防団は昭和五十九年九月十四日に発生した長野県西部地震災害に際し、全国員協力一致して行方不明者の捜索活動等に連日連夜献身的な活動を行ないました。その功績は多大であり、消防団の忠鑑であります。よってここに特別功労章を贈り、これと表彰します。

昭和六十年一月十二日

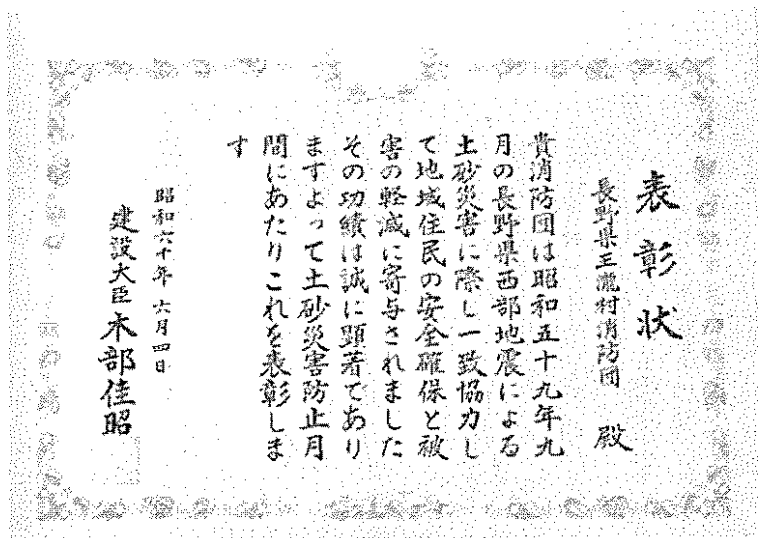
王滝村長 家高車郎

王滝村長表彰 (昭和60年1月12日)





長野県知事表彰（昭和60年5月3日）



建設大臣表彰（昭和60年6月4日）



第七七九号

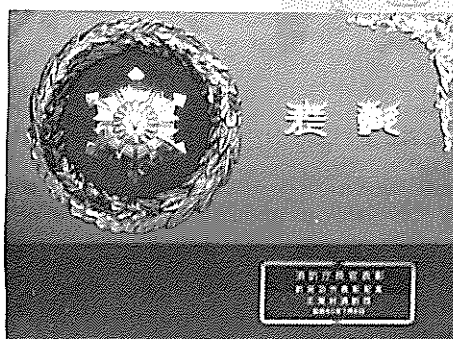
# 表彰状

王滝村消防団

貴団は昭和五十九年九月十四日発生した長野県西部地震災害際し、  
一、致協力して防災活動に尽力した  
功績はまことに顕著である  
よってここに表彰する

昭和六十年七月五日

消防庁長官 関根則之



消防庁長官表彰（昭和60年7月5日）

# 表彰状

王滝村消防団殿

貴団は昭和五十九年九月  
長野県西部地震による  
災害に際し被災者の救助に  
尽くされその功績は誠に  
顕著であります

よってこれを表彰します

昭和六十年九月一日

内閣総理大臣 中曽根康弘



内閣総理大臣表彰（昭和60年9月1日）

# 表彰状

王滝村消防団一同殿

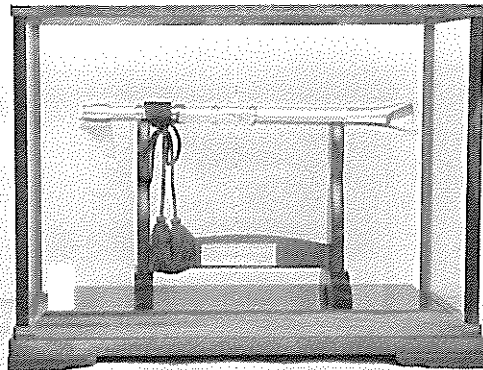
あなたがたは昭和五十二年一月間結成以来団員が一致協力して郷土の防災活動に日夜懸命に奉仕されてこられました。が、また昭和五十九年九月十四日午前八時頃長野県王滝村を中心に発生した大地震に際し約一ヶ月間の長期にわたり住民の避難誘導や罹災者の救助活動等に挺身されもって地域住民の尊厳・生命財産の保全に多大の貢献をされました。よってここにその労をねぎらい優れた功績をたたえこれを表彰します。

昭和六十年十一月二十日

財団法人日本顕彰会

会長 矢川良一

(財)日本顕彰会表彰 (昭和60年11月20日)



## 長野県西部地震災害に際し賜わった御支援、御厚情に対する御礼

早春の候、皆様方には益々御清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、このたびの長野県西部地震災害に際しましてはご多忙の折にもかかわらず迅速く人命救助、行方不明者の捜索活動にご尽力ください、また、心暖まるご厚志を賜わり誠にありがとうございます。厚くお礼申し上げます。

当村消防団においては、わずか百二十名という少数団員で地震発生以来日夜、避難、誘導、警戒、二十九名の行方不明者の捜索等に全力をあげてまいりました。地震災害の爪跡は思いのほか大きく、大量の土砂に阻まれた捜索活動は難航をきわめておりますが、県内の消防団の方々の積極的なご支援により松越地区では行方不明者十三名全員発見

することができました。これもひとえに皆様方の絶大なご支援の賜物と深く感謝申し上げますとともに、消防団組織の力強い絆をいっそう感じることができました。

まだ氷ヶ瀬・柳ヶ瀬・濁川地区は膨大な土石流の堆積により十五名の方が行方不明になっておりますが、われわれ消防団も一日も早く発見されることを願い頑張っております。

なお、今後も火災また地震等の災害による被害を最少限にいくとめるよう努力する所存でありますので、県内各地の皆様の変らぬご支援のほどお願い申し上げます。

本来、お伺いしてお礼申し上げるところでございますが、誌上をかりてご挨拶いたします。



静かな村に、突如M6・9の未曾有の大地震がおそったのです。死者、不明者二十九名、家屋の倒壊、道路決壊、水道断水等、それぞれ村全域に大被害をもたらしました。復興には、村民が一丸となって、一日も早く、明るい住みよい村になるように願うものです。

さて、この地震で不明者の搜索が、消防団、県警、自衛隊によって、余震の続くなかで東地区から始まりましたが、不明者が発見できず、あせりがみえたこともありましたが、犠牲者二十九名の中に、三名の現役団員が含まれています。また、消防団員で役場職員四十余名が参加できない状態で搜索活動を行わなければならないことは大変なことだと感じました。十一月二日の打ち切りまで団員一名当り十六日の出勤ということですが、消防にあたえられた使命とはい

え、職場、家庭を犠牲にまでして、よく協力してくれたことを、うれしく思っております。

中南信地区の消防団員の搜索応援をいただいたことは感謝にたえません。消防の絆を一層強く感じました。一日の搜索を終って帰って来た団員は、身体を休めることなく、夜警を行うという酷使状態でも、全員が頑張ったと思います。

終わりに、このようなことは最初で最後であってほしいものです。各省庁、消防庁、長野県、日本消防協会、長野県消防協会、その他各関係者のご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

なお、発刊が遅れたために、投稿文を書いた時期等が非常にまちまちとなっておりますのでご了承ください。

長野県西部地震活動体験記

昭和六一年三月二〇日 印刷

昭和六一年三月三〇日 発行

発行者

王滝村消防団

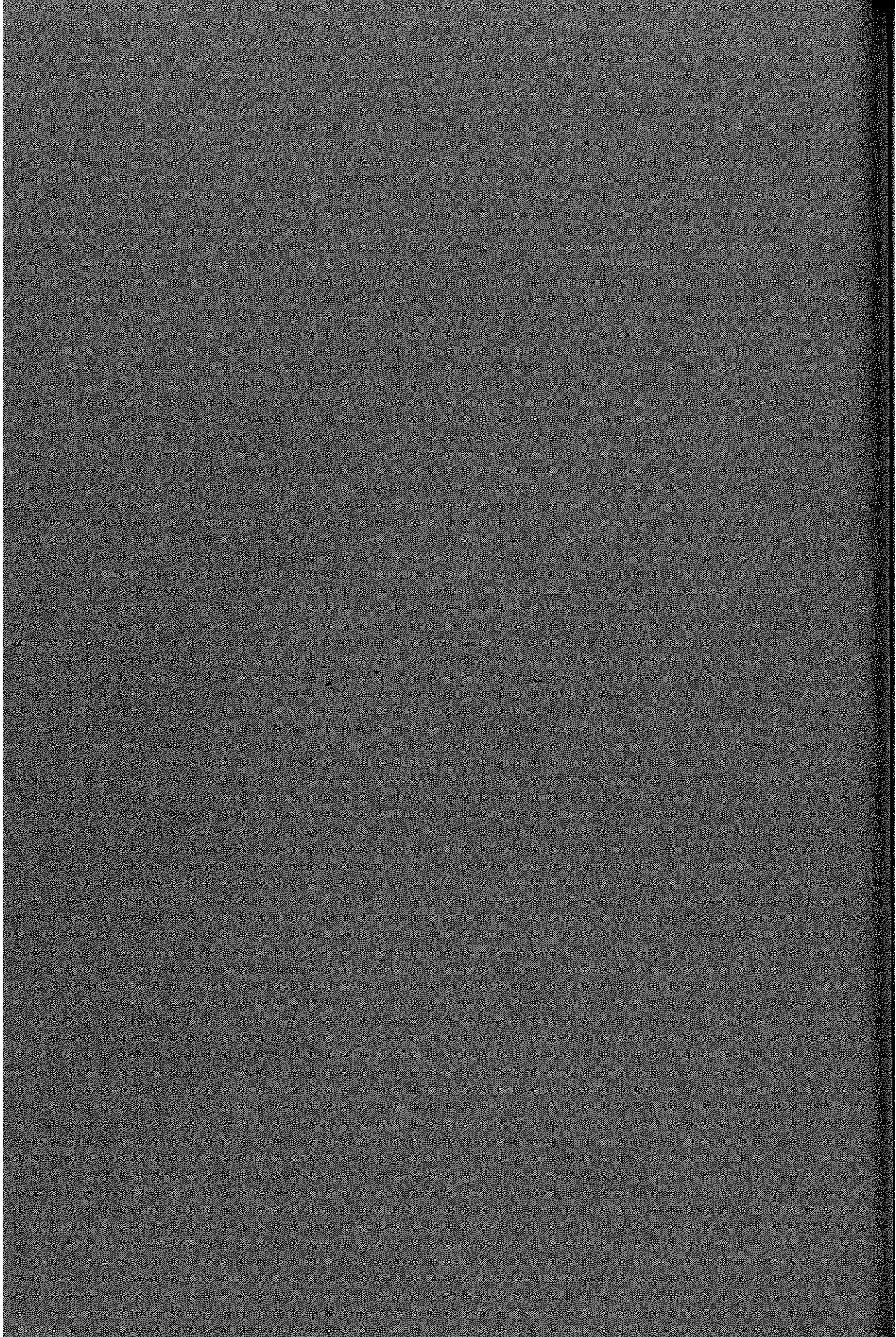
印刷者

団長 村木 興助

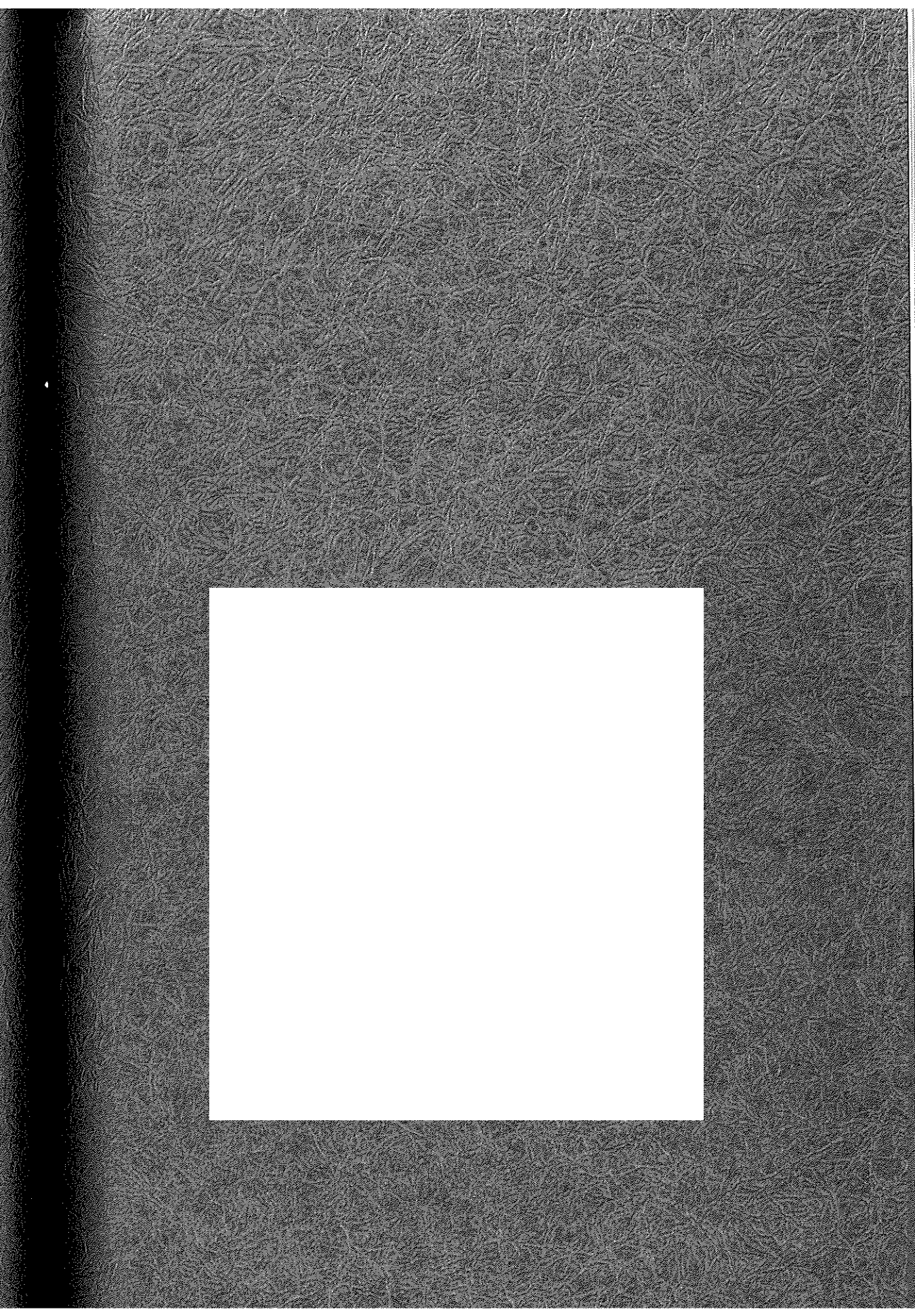
電算印刷株式会社

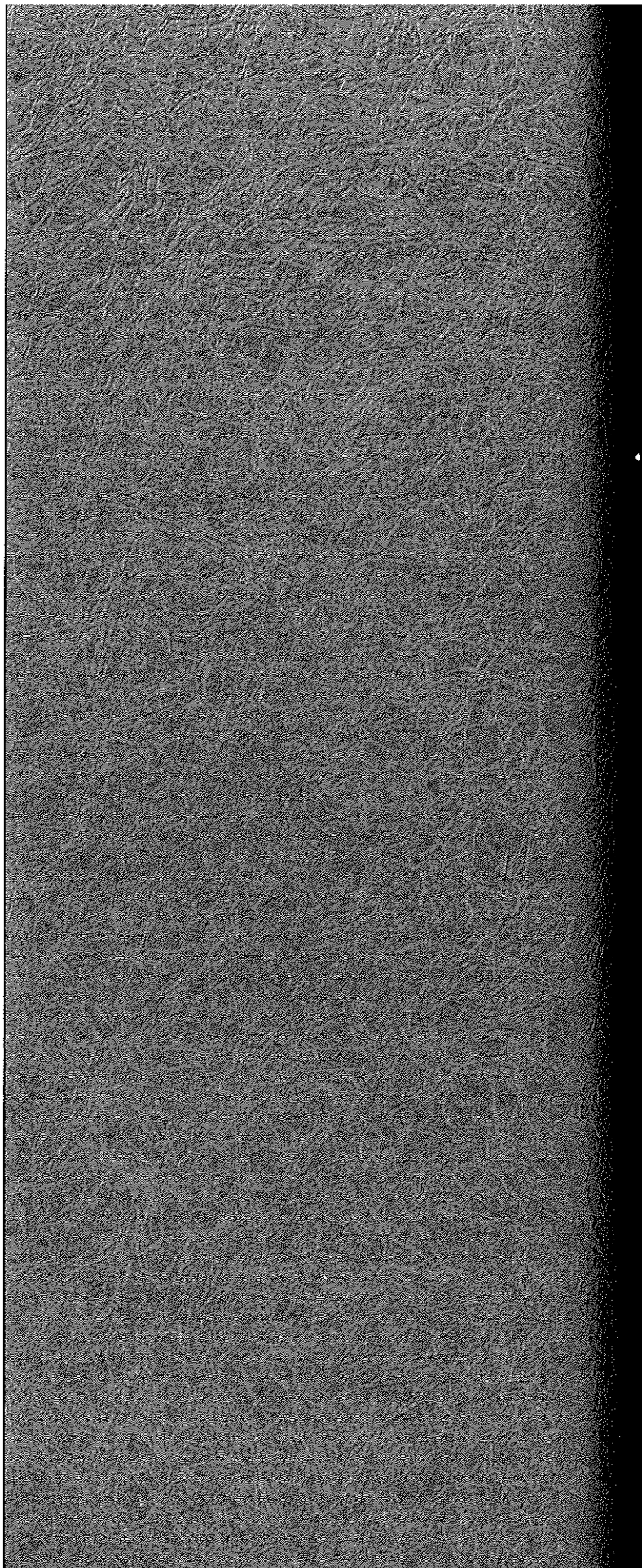
松本市筑摩三二七〇

制作協力 オフィスマゼンタ



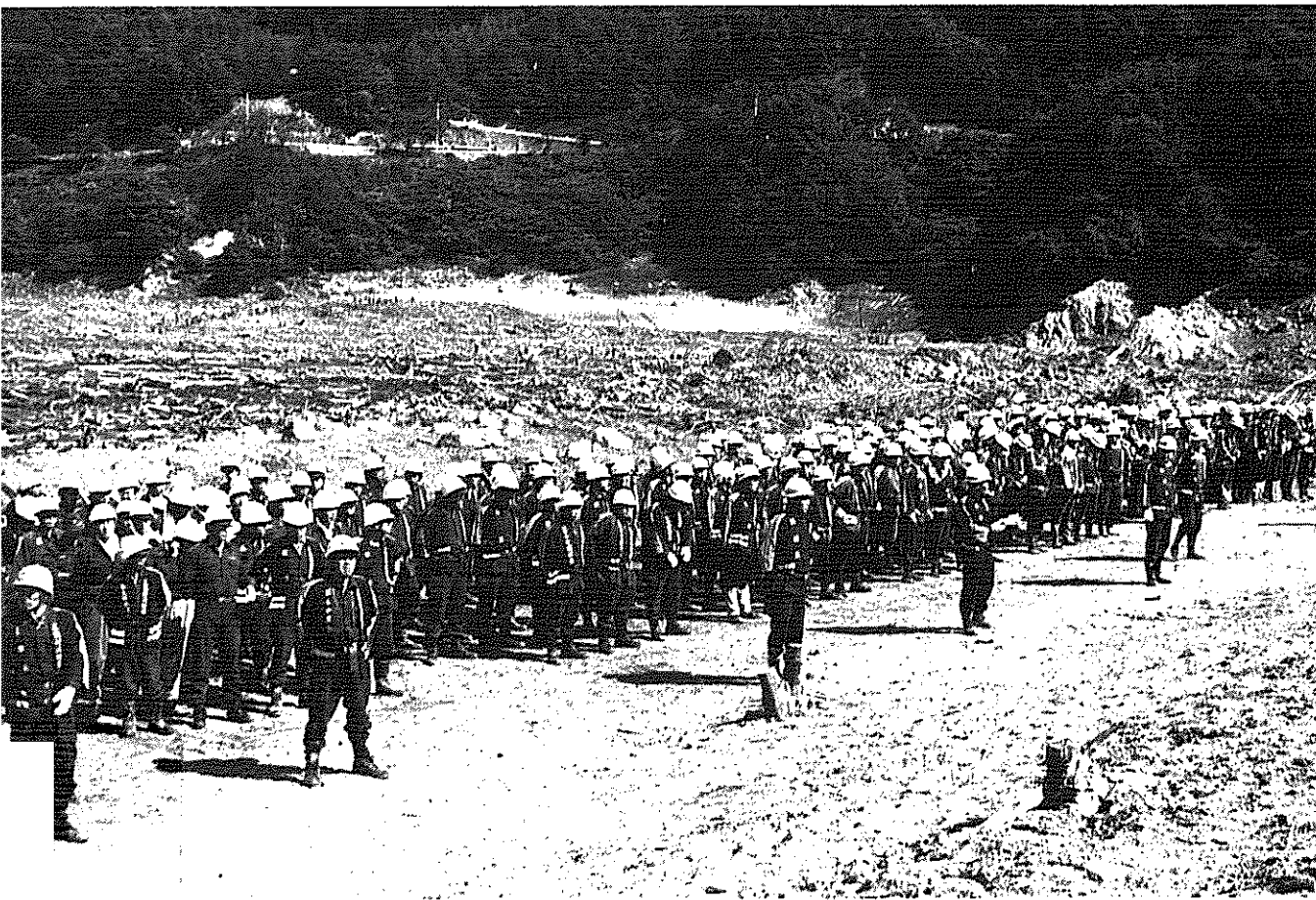








## 長野県西部地震活動体験記



王滝村消防団